

## 特集: 心理、教育、社会性の発達

連載トップ [http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post\\_e5f7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post_e5f7.html)

連載収録(1)～(24)まで

ニート、ひきこもり、学級崩壊、いじめ、中退、親殺し、などと「丸暗記しか出来ない大学生」との間には、共通する問題がある。日本における現代の病理に共通するものは「社会性の発達が阻害されていることにある」と喝破した社長が、複雑な問題を次々に解き明かしてゆく。この記事が社長の個人ブログ(「鐘の声」)に掲載されると、大きな反響があった。

ニートや「丸暗記しか出来ない大学生」に悩む人たちは、本人と家庭の問題であると決め付けられて閉塞感を強めていたが、やっと問題を客観的に考えられるようになった。大学関係者からは、大学は大学で取り組む課題が見えてきたという声が聞こえてきた。

この記事は、社長としての記事というよりは、学生たちに接する教師としての記事のように読むことが出来る。一方、「会社とはヒトを育てるところである」という意味で、やがて社員教育の責任をになうはずのわれわれにもおおきな参考になる。(SH Web Master)

(補1) この記事を引用または翻案して、公的に発言または発表される場合は、事前にメール等でお知らせください。

(補2) 社長の個人ブログは下記の通りである。今も記事は書き続けられている。  
<http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/>

---

### (1) 学生は変わったか

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post\\_e5f7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post_e5f7.html)

2005/07/17

昨日、「次世代の教育を考える」というテーマの研究会が行われていた。教育の世界の権威の皆さんは、どなたも大変おえらくて、うかつな発言は許さ

れない。他人を人格的に制圧しない限り、自分の生存が確保できないという勢いである。

ある意欲的な発表があり、「現在学生が変わってきたか」という質問が会場からあった。演者は「教育側は変わらないのに、学生は変わったかという設問と思うが、、」と言いよどんだ。すかさず、私はこれに体が反応した。してはならない発言だったかも知れないが、体が止まらなかった。

-----  
学生は変わったが、これは現在の教育制度の成果であり、正しく教育が行われた結果であると思ふ。

大学は変わらなかったから、学生が変わったのであると思われてならない。

大学の教員養成においては、教育心理学にピアジェの心理学がベースに採用されている。この理論に基づく教員養成においては、「形式的認知発達」にいたる11.5歳までの心理発達を理解し児童を支援することが指導されているのでありますが、この理論には11.5歳までに社会性の育成にかかわる心理は一切存在していないのであります。さらには、11.5歳以降の心理の発達は存在しないがごときです。

子供の社会性を育てない教員を育てたのは大学であり、その成果が過去の児童生徒の成長を通して正しく現在の学生に反映していると思われるのであります。別の演者の方からは、10歳くらいまでは「手続き形の記憶の能力」が他をしのいでいるのに対して、10歳前後には子供たちは社会性を獲得し、「エピソード形の記憶の能力」が台頭し、「手続き形の記憶の能力」は急速に力を失うとのご報告がありましたが、まさに、このとき教師は子供たちの社会性の発展を押しとどめようとするために、子供たちの大きな失望と反感とさげすみに直面するのであります。教師が対処を誤れば学級崩壊の危機が襲います。しかし、幸いな（不幸な？）ことに教室の支配に成功する有能な教員が多いので、子供たちは社会性を獲得する機会を失い、それゆえに社会性を前提とする記憶の方法を学ぶ機会を失い、丸暗記しか出来なくなるのであります。

別の方のご報告では、物理専攻の学生でさえ、大学の講義内容を丸暗記してテストに臨むものが多数派となって抽象的法則性を理解しようとしなないというのは、憂慮すべきではあります。大学生においては普遍的な現象であり大学教育の成果が正しく実現されたからであると思ふのであります。戦後60年の間に、社会性を発達させられなかった子供たちが成長して大学教員となり、さらによりよく社会性を育成しない学生を教員として選別強化し再生産しているのであります。今はこのように再生産された2代目の「社会性を育成しない教員」が教育現場の大半を占めているのであります。これは、まるで社会性のない遺伝子を選択してゆく系統栽培法による2巡目のより純化した子供たちというわけ

で、社会性が獲得できずに大学を出れば、社会参加の意欲をもてないニートの大量発生にもなるのであり、手続き型学習に頼ろうとする学生の大量発生とまさしく同根であると思います。

演者の方は、どう思われるでしょうか。

-----  
演者の方のご返事は「同意いたします」というものであった。

学生は、不幸にして、「社会性」を未発達のまま放置され、または厳しく押しとどめられたまま、大学に来ているのである。内心、長く、私は、この教育界の実情に深い懸念を抱いているのである。

実は、学生たちに「組織論」を教えようと思ったきっかけは、ここにありました。一般に信じられているのとは逆で、個人はバラバラに直接社会と契約しているわけではないこと、家族や企業、NPO など社会と個人の間介在し人々をつなぐさまざまな組織が成り立っていることや組織の不思議な事象のある部分の謎を解き明かして見せれば、社会に立ち向かう勇気が湧き、またとんでもない勘違いによって世間から手痛い反撃を受ける危険も減るだろうと思ったからである。

教壇から「組織論」を語ってみると、教室はいつの間にか静まり返って、学生らは私に真剣な目をむけ、ときにうつむいたり、天を仰いだり、いつになく、押し殺したような無言の感情を激しく表して聞き入っていた。学生らのブログの感想を読むと、振り返って深く思い当たることがあった、社会に出たら「金儲け」だけが生活かと思わしく思っていたが、そうでないことがわかって思わず涙が出てきた、というものであった。

これからも、私は「情報組織学」を学生らとともに学び、高めて行きたいと心に誓っているこのごろである。

これで、また、私は教育の権威の皆様からは白眼視されそうである。  
門外漢の戯言と、お許しを願いたい。

琵琶

-----  
**(2)「教育心理学」の限界と希望**

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2\\_4ce5.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2_4ce5.html)

2005/08/20

7月17日、「心理、教育、社会性の発達(1)--学生は変わったか」という記事を書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post\\_e5f7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post_e5f7.html)

その後も、いろいろと考えさせられることが多く、ゼミの学生向けのブログにも「日本人の社会性の喪失」を考える」

([http://99521633.at.webry.info/200508/article\\_1.html](http://99521633.at.webry.info/200508/article_1.html))や

「日本人の社会性の喪失」を考える。 -その2- 」

([http://99521633.at.webry.info/200508/article\\_2.html](http://99521633.at.webry.info/200508/article_2.html))も書いた。

思うところが多々あるので、順次、述べてゆきたい。

さて、7月16日の某研究会こと、大学における教員養成の教育課程に問題があるのではないかと、私は無鉄砲にも発言した。その趣旨は、教員養成の教育課程で必修とされる「教育心理学」には時代が教育に要請しているある大切な部分が欠落しているということである。つまり、幼児-児童-生徒-青年の社会の成り立ちへの認知発達を一切含んでいないといういささか荒っぽい指摘だった。この研究会には文部科学省の関係者も参加していたが、直後に発表された施策は、「複数学年同居の合宿で社会性を獲得」と言うもので、研究会の活動の成果を示しているのかもしれない。

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20050725-00000171-jij-pol>

さて、現在の多くの大学の「教育心理学」は、ピアジェ(1896-1980)の発達心理学に依存していること、その後の学問的発展に追随していなことに私は苛立ちを感じていた。ピアジェが人の初期の認知発達の様子(発生的認識論)を心理学の立場から明らかにして、児童-生徒の学校教育の方法(学年制教育法)を正当化することに役立ったことは広く知られており、その功績は大きい。しかし、彼は、大きな間違いを2つ犯していた。1つは、人は必ずしも自然年齢の刻みだけで認知発達が進むのではないことに無頓着だった。もう一つは、子供たちがあるとき社会の成り立ちに強い関心を抱き、社会性を大きく発達させる心(認知)の発展を遂げる時期がある、ということを見逃していることである。前者については、「学年制教育制度に対する批判」と言う形で広く語られるようになっていたので、私の専売特許と言うわけではない。他方の後者についてはどうだろうか、心ある人の筋の通った見解を聞いたことがない。学校教育の担い手である教員の多くが「ヒトの社会性の発達」を知らないまま、教壇に立っ

ているのである。これほど恐ろしい現実があるだろうか。もっとも現役の教員自体も「社会性の発達」を促す教育を受けてこなかった世代が圧倒的である。社会性を十分身に着けているとはいえない学校教師が現場で「社会性の発達」を自分たちが教えないことに何の疑問も持たないのは当然である。本人らは責められても、何を言われているのかさえ見当がつかないはずである。

しかし、私とその研究会の会場からこれを指摘するイレギュラ発言をしたときには、私にその確信があったわけではない。漠然とした恐れと懸念に過ぎなかった。発言しながら、一方では、本当に大学における教員養成のための「教育心理学」が社会性の発達を無視しているのか、を知りたかった。証拠(evidence)がほしかった。

帰宅してから早速アマゾン(日本)で「教育心理学」を検索してみた。336件の該当の書籍があった。売れ行き順に検索結果を表示した。の中には、大学の教科書と思われるものとそうでなさそうな本が混在している。すべての本を買って精査するほどの時間もお金もないので、10位以内に入っている教職課程の教科書とみなせるものに絞って購入した。次の4冊である。

石隈利紀,「学校心理学」,誠信書房(1999)--1位(5.0個)

下山晴彦,「教育心理学(2)」,東京大学出版会(1998)--3位(3.5個)

大村彰道,「教育心理学(1)」,東京大学出版会(1996)--4位(4.0個)

多鹿秀継,「教育心理学」,サイエンス社(2001)--7位(4.0個)

2位、5位、6位、8位、9位、10位の本は、一般人向けの読み物だったり、荒れる学校対策の実践本だったりするようだった。教育課程の教科書とは見えなかったものでそれらは省いた。

該当する4冊のどれを見てもヒトの心理的発達において、「社会性の獲得・発展」は存在しないようである。仔細に読めば本文のどこかに社会性に触れているところが皆無ではないのかも知れないが、少なくとも章や節に堂々と取り上げているものはない。そのようなことを書けば、異端としてこの学問の世界からは排斥されるのだろうか心配になってしまう。私の危惧は的中していたのである。

とはいえ、「大村彰道,「教育心理学(1)」,東京大学出版会(1996)--4位(4.0個)」は、東大の教育心理学の定番テキストのようだが、ここにはさすがに「4.2 社会的認識の学習と社会科学習」という節がある。さすがに東大ともなれば、「社会的認識」の必要性を無視したわけではないということである。しかし、「第1章 認知の発達」「第2章 言語の発達」「第3章 数概念の発達と算数・数学の学習」「第4章 科学的認識・社会的認識と教育」・・・のような章立てを見れば分かるように、ヒトの自然な発達の中に「社会的認識の獲得」は位置づけられてはいない。「算数・数学の学習」までは「(数概念の)発達」が必要とされ

ているが、「社会的認識の獲得」はわずかに銀行の役割の理解など、金銭的な現象に対する認知と結び付けられて説明されているに過ぎない。「社会性の発達」についても他人の学説が幾分紹介されているが、筆者の確信としては語られていない。学生たちが「金だけが人生の目的か」と絶望的になるのも止むをえないのである。主として、社会科教育のために利用する教材の例として社会の制度が語られているにとどまっているとしか見えない。ヒトの心理的発達において、お金関係以外に「社会性の獲得・発展」の時期はないのだろうか。「社会的認識」の前提として「心の社会性の獲得」がなければ、社会への関心が生まれないだろうし理解も不十分だろう。他の3冊にいたっては、社会科教育の教材としてさえ社会性の獲得の扱いはないのである。

いや、ご専門の方からは、そんなことはとうに織り込み済みであり、教員養成にそんな些細なことまで教えないだけなのだという反論が聞こえてきそうである。しかし、「社会性はヒトの成長とともに育まれ、獲得され、成長するもっとも大切で基本的な人格の一つの側面なのではないのだろうか。社会科や理科は暗記物として、教師が叩き込めばいいのだろうか。心の発達を伴わない社会科や理科が果たして身につくのだろうか。それでも、「ヒトの社会性の心を育むのは些細なことに過ぎない」なのだろうか。「教員養成にそんな些細なことまで教えない」とすれば、現場に立つ学校教師たちは（教育を受けていないのだから）知らずに教育現場の悲劇の再生産に加担していることになるのではないだろうか。教師たちこそ、いい面の皮である。

では、「社会性を育む」教育を進めるテキストはまったくないのかといえ、アマゾンの上位には見出せなかったが、次のようなテキストがあった。大半の教職課程の「教育心理学」とは違っている。これは希望である。

桜井茂男編,「たのしく学べる最新教育心理学」,図書文化(2004)

「第9章 社会性を育む」があり、全体で19ページを割いている。その中の節として「I 向社会的行動」「II 道徳性」「III 親子関係の発達」「IV 仲間関係」がある。それぞれの節は多数の項目に分かれて詳細な議論を展開している。欲を言えば、社会性の獲得には、恋愛の心の働きが極めて大きく作用するはずであるがこれに触れていない点だけだろう。編者は、これより先に、次のような本の翻訳をしているが、前述の本には次の本の原著からの影響が見られるようだ。

桜井茂男訳,「人を伸ばす力」,新潮社(1999)

章のタイトルを引用するが、なかなか示唆に富んでいる。

第1章 権威と服従

第I部 自律性と有能感がなぜ大切なのか

- 第 2 章 お金だけが目的さ
- 第 3 章 自律を求めて
- 第 4 章 内発的動機づけと外発的動機づけ
- 第 5 章 有能感をもって世界とかかわる
- 第 II 部 人との絆がもつ役割
- 第 6 章 発達の内なる力
- 第 7 章 社会の一員になるとき
- 第 8 章 社会のなかの自己
- 第 9 章 病める社会のなかで
- 第 III 部 どうしたらうまくいくか
- 第 10 章 いかに自律を促進するか
- 第 11 章 健康な行動を促進する
- 第 12 章 統制されても自律的に生きる
- 第 IV 部 この本で言いたかったこと
- 第 13 章 自由の意味

私の組織論 ([http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/8\\_600d.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/8_600d.html) など) の授業を聞いて、「人生はお金だけではなかった、と安心して、思わず涙がこぼれてしまった」と語った学生がいた。いかに現代の教育が子供たちの素朴な心を縛りつけ傷つけていたのかと私のほうも、思わず眼が潤む思いだった。上記の本の「第 2 章 お金だけが目的さ」では、お金で釣って何かをさせようとするところのおろかさを心理学の実験の成果を示しながら、完膚なきまでに暴いている。「社会性を育む」とは、「金をチラつかせる」こととは違うのである。

大学の教職の授業で「社会性の発達」を教えている先生はいないのだろうか、インターネットを探ってみたところ、シラバスで見ると大阪府立大学の人間教育学科岡本真彦先生などが授業で「社会性の発達」を教えていらっしゃるようだ。

<http://wwwhs.cias.osakafu-u.ac.jp/psy/DocJ/class.html#education>

もちろん面識はないし、見当違いかもしれないが、私にとっては希望の持てる先生のお一人ような気がしている。

そのほかにも、いろいろな先生方がいらっしゃる。

千葉大学の林洋一先生

<http://www.l.chiba-u.ac.jp/Syllabus/undergraduate/2005/1st/intensive/824/>

宇都宮大学橘川真彦先生

<http://www.zuisousha.co.jp/book2/4-88748-015-6.htm>

江戸川大学柴田良一先生

[http://syllabus.edogawa-u.ac.jp/detail.php?oh\\_code=1270&nendo=2005](http://syllabus.edogawa-u.ac.jp/detail.php?oh_code=1270&nendo=2005)

大正大学柴田良一先生

<http://www.tais.ac.jp/syllabus/syllabus/3271.html>

他にも何人もの方がいらっしゃるようだ。

これらの先生方の努力は、まことに時代に合致するものであり、心強いものを感じず。大半の「教育心理学」の嘆かわしい現状はともかく、これらの意欲的な研究者・大学人の活躍を希望を持って見つめていたいと思う。

ところで、余計なことだが、心理学の世界は、主要な学派だけでも40くらいに上るらしい。どの学派がどのような主義主張なのか門外漢の私にはよく分からない。資格制度をめぐる利権の争奪戦もあるのだという。政治家と結びついて政治運動をする学派もあるらしい。華道やお茶の世界と似て、どの学派にいるかによって、考え方も行動も違うようである。組織論の立場から見ると、学問的知見の流通が阻害され、学問の発達にはなほだよろしくないように思うのは私だけだろうか。統一した学会または連合会があるといいと思う。

琵琶

---

### (3)「記憶」の社会性

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3\\_e921.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3_e921.html)

2005/08/21

7/16、「心理、教育、社会性の発達(1)--学生は変わったか」という記事を書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post\\_e5f7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/07/post_e5f7.html)

この中で、「手続き型記憶」や「エピソード型記憶」という言葉を使った。深い意味ではなく、会場で他の発表者が使った言葉を、発表者が使用した意味で使用したに過ぎない。

ここでは、ヒトの「記憶」とコンピュータの「記憶」を対比しながら、社会性の獲得と「記憶」の構造の変化について述べたい。

本日のフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によれば、「記憶」はス



クワイア（ラリー・スクワイア著「記憶と脳、心理学と神経科学の統合」(医学書院) など)によって、基本的な3つ分類(感覚記憶、短期記憶、長期記憶)が提案されている。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A8%98%E6%86%B6#.E8.A8.98.E6.86.B6.E3.81.AE.E9.9A.8E.E5.B1.A4>

ウィキペディアのこの記事では、その後の知見も含めて、分類をもう少し増やしている。

ウィキペディアのこの記事の目次を見ると、下記のようにになっている。

## 表1 目次

- 
- 1 感覚記憶
- 2 短期記憶(STM)
- 3 作動記憶
  - 3.1 中央制御系
  - 3.2 音韻ループ
  - 3.3 視空間スケッチパッド
- 4 長期記憶(LTM)
  - 4.1 陳述記憶
    - 4.1.1 エピソード記憶
    - 4.1.2 意味記憶
  - 4.2 非陳述記憶
    - 4.2.1 手続き記憶
    - 4.2.2 プライミング
- 5 自伝的記憶
- 6 展望的記憶
- 7 記憶の階層
- 8 記憶の過程
  - 8.1 記銘(符号化)
  - 8.2 保持(貯蔵)
  - 8.3 想起(検索)
- 9 関連項目
- 

記憶の分類という意味では、次の種類を取り上げればよいだろう。

表 2 記憶の分類

1 感覚記憶

視覚では 1 秒間弱、聴覚では約 4 秒間保持される。保持される情報はかなり多い。残像のような記憶。

2 短期記憶(STM)

短期間保持される記憶である。約 20 秒間保持される。7±2 まで(5 から 9) の情報しか保持できない。

3 作動記憶

作動記憶は短期的な情報の保存だけでなく、認知的な情報処理も含めた概念である

3.1 中央制御系

音韻ループと視空間スケッチパッドを制御し、長期記憶と情報をやりとりするシステムである。

3.2 音韻ループ

言語を理解したり、推論を行うための音韻情報を保存するシステムである。

3.3 視空間スケッチパッド

視覚的・空間的なイメージを操作したり、保存したりするシステムである。

4 長期記憶(LTM)

長期間保持される記憶である。忘却しない限り、死ぬまで保持される。長期記憶を蓄える貯蔵庫を長期記憶貯蔵(LTS)と呼ぶ。

4.1 陳述記憶

言葉で表現できる記憶である。宣言的記憶とも呼ばれる。

4.1.1 エピソード記憶

個人的体験や出来事についての記憶である。

4.1.2 意味記憶

意味記憶とは言葉の意味や世界のあり方についての記憶である。

4.2 非陳述記憶

言葉で表現できない記憶である。非宣言的記憶とも呼ばれる。

4.2.1 手続き記憶

物事を行うときの手続きについての記憶である。いわゆる体で覚える記憶がこれにあたる。

4.2.2 プライミング

先行する事柄が後続する事柄に、影響を与える状況を指して「プライ

ミングの効果（または「プライミング効果」）があった」と称される。

#### 5 自伝的記憶

自分自身の来歴に関する事柄についての記憶である。

#### 6 展望的記憶

総計 200,000 米ドルの寄付を集めるため、ウィキメディア財団はあなたのご支援を必要としています。

-----

さて、これらの知見は、大脳生理学や精神分析学、心理学の成果だけによっているのではないということに注意を払いたい。実は、コンピュータにおける「記憶」の技術のアナロジーに発しているところがたぶんに存在する。

ところで、私は、人口知能の研究や応用技術の開発に長く従事してきたので、大脳生理学や精神分析学、心理学よりも、認知工学や知識記述法に親しみがある。大脳生理学や精神分析学、心理学の人々が何と云うかは別にして、実はこの人々が手本に取り上げている知識記述法（「記憶」の方法）は、システム技術者が内省的に発見した「記憶の心理学」なのである。「ヒトはこのように理解し、記憶しているに違いない」という仮定の上に、知識記述法（「記憶」の方法）を作り上げてきたのである。

大脳生理学や精神分析学、心理学の人々の側にあるラリー・スクワイアらの分類をコンピュータ分野の知識記述法（「記憶」の方法）と比較してみたのが、次の表である。

ちなみに、コンピュータ技術者の言うデータ・情報・知識とは次のようなものであると、私は長く主張してきた。

- ・データ ヒトが受け取った刺激を記号や数字に変えて記録したもの
- ・情報 データをヒトが理解しやすくするために加工したもの。（代表値の抽出、比較、例示、など）
- ・知識 情報に条件分岐を付属させて、問い合わせに適切に応えられるようにしたもの

表3 ヒトの記憶とコンピュータの記憶

-----

- 1 感覚記憶 . . . . . データ以前のヒトの記憶
- 2 短期記憶 (STM) . . . . . データ直前のヒトの記憶
- 3 作動記憶 . . . . . データ化作業中のヒトの記憶
  - 3.1 中央制御系
  - 3.2 音韻ループ

- 3.3 視空間スケッチパッド
- 4 長期記憶(LTM) . . . . . コンピュータ上のデータ・情報・知識、プログラム
  - 4.1 陳述記憶 . . . . . コンピュータ上のデータ・情報・知識
    - 4.1.1 エピソード記憶 . . . . . コンピュータ上のデータ・情報
    - 4.1.2 意味記憶 . . . . . 意味ネットワーク (コンピュータ上の知識の一つ)
    - 4.1.3 構造化 (メタ化) 記憶 . . . フレーム (コンピュータ上の知識の一つ)
  - 4.2 非陳述記憶 . . . . . コンピュータ上のプログラム
    - 4.2.1 手続き記憶 . . . . . データ処理プログラム (コンピュータ上のプログラム)
    - 4.2.2 プライミング . . . . . シーケンス制御、フィードバック制御、フィードフォワード制御プログラム (コンピュータ上のプログラム)
    - 4.2.3 社会的配慮 . . . . . 予期駆動型フレーム (コンピュータ上のプログラム)
- 5 自伝的記憶 . . . . . 文書ファイル
- 6 展望的記憶 . . . . . 文書ファイル

-----

こうしてみると、コンピュータ上の「記憶」については、「長期記憶」に対応する部分だけが発展しており、その前後は対応していないことが判明する。「ヒトとコンピュータはどちらのほうがすぐれているのか」という愚問は今でもよく聞くが、ヒトに決まっているのである。上表をみても、ヒトに出来て、コンピュータに出来ない「記憶」は多い。ヒトがすぐれているのは、そのせいだけではないのは言うまでもないが。

ところで、「長期記憶」に対応する部分だけが発展したコンピュータ上の「記憶」についてよく見ると、ラリー・スクワイアらの分類にはないものがある。表の左部分には を付けて他と区別してある。この項目は、表 2 にはなくて、表 3 についかしたものである。

ときに、コンピュータシステムの大半は「情報システム」というものである。「情報システム」は作られる組織の運営のルールを支援するものであり、ここに使用される「記憶」は、組織というものの社会性を紛れもなく反映している。ヒトの「記憶」の中に社会性を発見するよりも早く、コンピュータのシステムは組織の社会性をコンピュータの中に記憶しなければならなかったのである。コンピュータのシステムが、万一組織の社会性をコンピュータの中に記憶することが出来なかったならば、「情報システム」は成立せず、コンピュータは今でも

無用の長物であったに違いない。

一方、そのコンピュータの「記憶」の大切な一分野に対応するヒトの「記憶」が存在しないはずはないのである。ヒトはコンピュータよりもすぐれているのであるから、ヒトの中になくはないものはたぶんコンピュータでは実現できないのである。実際、(私のような、ロートルの)コンピュータ技術者は、ヒトや組織の振る舞いをジッと観察して、コンピュータシステムを作ることに習熟したきたのである。ヒトや組織こそ、コンピュータシステムのお手本であった。しかし、表2に の部分がないというのは、ラリー・スクワイアら大脳生理学や精神分析学、心理学などの分野の人々が、単に見落として発見できなかったものに過ぎないに違いない。ヒトにないものをコンピュータ技術者がまねるはずはない。ヒトにないはずはないのである。

表4 長期記憶の分類の拡充

---

4	長期記憶(LTM)	.....	コンピュータ上のデータ・情報・知識、プログラム
4.1	陳述記憶	.....	コンピュータ上のデータ・情報・知識
4.1.1	エピソード記憶	.....	コンピュータ上のデータ・情報
4.1.2	意味記憶	.....	意味ネットワーク(コンピュータ上の知識の一つ)
4.1.3	構造化(メタ化)記憶	.....	フレーム(コンピュータ上の知識の一つ)
4.2	非陳述記憶	.....	コンピュータ上のプログラム
4.2.1	手続き記憶	.....	データ処理プログラム(コンピュータ上のプログラム)
4.2.2	プライミング	.....	シーケンス制御、フィードバック制御、フィードフォワード制御プログラム(コンピュータ上のプログラム)
4.2.3	社会的配慮	.....	予期駆動型フレーム(コンピュータ上のプログラム)

---

長期記憶の部分だけを取り出したのが、上表(表4)である。

の項目は2つある。いずれも「フレーム」と関係がある。フレームとはコンピュータ科学における「フレーム理論」によって作成されるものである。これは知識の要素(宣言的知識、要素の名称とその単数または複数の属性や振る舞いを記述したまとめ、これを知識ユニットと呼ぶことがある)を記述しておくだけでなく、知識の要素間(ユニット間)を階層化して

つなぐ記述法なのである。たとえば、サルとイヌは哺乳類である。哺乳類や節足動物などを合わせると「動物」という概念に行き着く。「動物」と「植物」と「菌類」をあわせれば「生物」という概念にいたる。ヒトの知識は抽象化と階層化によって構築されているものが多い。近代社会学や政治学、哲学などで、「構造主義」がもてはやされた時代があり、「メタ知識」「メタ概念」が叫ばれた時代がある。今では、当たり前のこととして騒がれたりはないが、ヒトの認識には確かに階層的な部分があるのである。これらの階層化をコンピュータシステムの上に記述できるのが唯一フレームなのである。フレームは現在知られているものの中ではコンピュータ上で階層型の知識を記述する最も強力な手法である。

意味ネットワークも「名称」を相互に結んでゆくことが出来るが、名称のもつ属性や機能を一つのユニットの中に記述できない点や何よりも階層化できないという点で「フレーム」とは根本的に異なるものである。現代の社会的な組織は、「理念や目的」を持つヒトの集団であり、「自己責任」を前提に「貢献と見返り」「コミュニケーションと対等」を担保にして成立し、組織同士が結合しどこまでも横に広がるネットワークと上方統合を目指す階層構造を持つ定常流の実在である。ネットワークと階層構造はいわば社会の横軸と縦軸のように絡み合っている。2つがともになければ社会は成立しない。意味ネットワークは、横に広がる社会的組織のネットワークを手本にした概念であり、フレームは社会的組織の階層構造を手本にした概念である。横に広がるネットワークだけでは現代社会は理解できない。社会的ネットワークにとどまらず、たえず流動し生成発展消滅する階層構造を理解しなければ社会を理解したとはいえない。

意味ネットワークはヒトの抽象的な記憶を「関係」という記述方式で表すことが出来たが、それ以上の力はないのである。階層構造を記述することはできない。世の中には、階層化され整理された知識を持たないまま、どこまでもガラガラとつながる知識の連鎖を網の広がりのように持っている人格もないとはいえない。一見すぐれた知恵者のように見えて、少しも知識が整理されずに、どこまでも考えが収束しない、特異な人格の持ち主である。時々、すぐれたヒトと勘違いされて、大学や研究所の要職についていたりするが、部下も組織を強力した運営しなければならぬ他の者にとってもたいへんに迷惑な人格である。階層性社会に関する認識が完全に抜け落ちているのである。抜け落ちたというよりも構成できない人格なのである。ネットワークの理解も社会性の認識の一部であり、その第一歩には違いないが、概念を階層化出来ない限り、階層化の縦軸とネットワークの横軸から成立する社会の全体構造がまったく理解できないのである。

さて、社会性の獲得によって獲得できる「記憶」が何かといえ、次の 4 種類である。

- 4.1.2 意味記憶 . . . . . 意味ネットワーク (コンピュータ上の知識の一つ)
- 4.1.3 構造化 (メタ化) 記憶 . . . フレーム (コンピュータ上の知識の一つ)
- 4.2.2 プライミング . . . . . シーケンス制御、フィードバック制御、フィードフォワード制御プログラム (コンピュータ上のプログラム)
- 4.2.3 社会的配慮 . . . . . 予期駆動型フレーム (コンピュータ上のプログラム)

ヒトは、6 歳から 10 歳くらいまでの間に「社会性」を獲得する。つまり、男の子が女の子を意識し、女の子が男の子を意識するときまでには、ひと通りの社会性を獲得していなければ、恋も出来なければ、両性がそれぞれに所属する集団の社会的承認の下に新しい家族として出発することなど出来ないからである。恋をする年齢と結婚する年齢は、古代には現代ほどの隔たりはなかったはずであり、人類生存の必須条件であったに違いない。

社会性を獲得する以前の幼児や児童は、次のような記憶が優勢であり、抽象化された知識の獲得は弱い。

- 4.1.1 エピソード記憶 . . . . . コンピュータ上のデータ・情報
- 4.2.1 手続き記憶 . . . . . データ処理プログラム (コンピュータ上のプログラム)

しかし、社会性を獲得した後の児童や生徒、学生らの記憶としては、これらエピソード記憶や手続き記憶はのような記憶力は減退して、ネットワーク型とフレーム型の「記憶」が優勢となるのである。とりわけ、階層化知識 (フレーム型の知識) は、具体的な事例の上に抽象化された法則性やルールという上位概念が構成できる基礎となるので、この能力が成長しているのといえないのでは大変な違いが生ずる。組織への理解の脆弱性から不登校、社会的引きこもり、ニートが生じているのもここに共通の理由がある。この子供たちは社会性を獲得する機会に恵まれなかったのである。また、十分な社会性を獲得できなかったために階層化されたフレーム型の知識 (「記憶」) が構築できないので、物理学も暗記で切り抜けようという理学部、工学部の学生が発生してしまうのである。フレーム型の知識 (「記憶」) が構築できなければ、具体的事例の上に抽象化した法則的知識を構築できないのである。具体的事例の丸暗記で切り抜けるしか、その人格には対応が出来ないのである。抽象化した法則的知識を構築できない物理学者や理科の教師が我が物顔で社会に出てくるとしたら、考えるだけで恐ろしい光景であるが、すでにそうなってしまっているというのが今時なのである。

私が、声を大にして言いたいのは、教育に「社会性を育む」力を復活させ、子供たちに階層化した深い理解を喜びとともに体験させたいということである。「深い理解」とは、もともと階層化した知識であることを意味していたはずであるが、いつの間にか、関連知識をたくさん平板にならべている状態をさす言葉に墮してしまっているように思う。階層化（メタ化）していない平板な知識の広がり、決してヒトの知恵の完成品ではない。へそがどこにあるのかもさっぱり分からない、単なる横並びデータの広がりだけである。

心理、教育と「社会性」は、かくして、強固なつながりのあることが明らかになった。--、と私は思う。

専門家の皆さんにも、非専門家の皆さんにも、たくさんの議論を期待したい。

琵琶

---

## (4) 若者の自立と意欲に拍手

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/4\\_7ce2.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/4_7ce2.html)

2005/08/22

### 1. 若者自立塾記念講演会

8月21日（昨日）船橋商工会議所で開かれた「若者自立塾記念講演会」に行った。厚生労働省と千葉県の事業のひとつである。

[http://99521633.at.webry.info/200508/article\\_3.html](http://99521633.at.webry.info/200508/article_3.html)

お目当ての放送大学の宮本みち子教授（元千葉大学教授）の講演は、さすがに網羅的で調査の実際にそった分厚いものだった。わかってはいたが、「ニート、中退、不登校は、同根の問題」と言うことが強調された。懇親会では早速名刺を交換させていただいた。

さて、宮本先生の講演はさておいて、面白かったのは、その他の関係者（若者自立塾で指導員となる皆さん）のお話だった。

1)ニートは、金も学歴もなく、社会に出てゆく自信もないヒトであるという定義に、演劇集団銅鑼の代表者は、"まるで自分たちのことのようにだが、そんな自分たちが他人に感動を与えるという明確な目的意識で、生き生きと活動している。



若者と一緒に感動を作り出すことが出来ればこの塾は成功ではないか"と語って会場の拍手を獲得していた。生身のヒトとの交流を避けているニートが、ヒトと交わる大きな機会がおとづれることが期待された。

2)千葉大教育学部の体育教師の徳山教授は年間半分は海外遠征をしているロッククライマ(フリークライマ)が定職にはつけない実態を語って、お金よりも彼らにとって「あの壁を登りたい」ということが目標なのです、若者には多様な目的を認めてあげる必要があるのではないだろうかと述べた。

3)ジェフ市川の専任コーチ(事実上のマネージャ)氏は、"直近1年間で約4万人の小学生と会って握手した。挨拶をして握手する。子供たちはそのとき感動してくれるだけではない。サッカーの会場に来て、大声で(選手名ではなく)私の名前を叫んでくれるのである。逆に言えば、そんな単純な交流でさえ今の小学校ではされていない。第一に自分が呼ばれていった小学校で、私から「おはようございます」と声をかけても、返事をしないかったり、逃げていってしまう教師さえいる、これでは挨拶の出来る子が育たなくて当然ではないのか"と、語ったときにはさすがに会場はシンとなってしまった。教師が「社会性を育む」どころではなく、教師自身が社会性を身に着けていないのである。

4)最後に登場したシンガーソングライター(千葉大学修士課程在学)は、プライドを忘れず、"負けまいとしてここまでやってきました、もう辞めろという圧力は、今の若者にかけてください"と訴えて、自分の歌を2曲歌った。2つ目の曲は、元の彼女と長い時間をかけてやっと普通に話が出来ようになったという長い心の変遷をつづった「パラレル」という歌である。恋は苦しくとも若者の社会性を美しく磨き上げるのである。

これらの発言を聞きながら、人はパンのみにて生きるにあらず、と言う言葉を思い起こしながら、もう一つのことを考えていた。

若者は、いつの時代も、トンガって生きていた。誰にも認めてもらえない渴きに耐えながら、いつか見ている、他人か認めてくれる自分になってみせる、と思っていたに違いない。

30年前や40年前の自分もそうだった。トンガって生きて、ぶつかって傷ついても、精一杯ぶつかった結果なら傷のいえるのが早かった。他人に言われてやってみて傷ついたのなら、もう、勧められても、立ち上がる気がしなかっただろう。無鉄砲が若者の特権である。

トンガってやってみるとは、とりもなおさず、個性(パーソナリティ)を確立する過程ということではないのかと思う。

若者の諸君よ、トンガってやってみることはいいことだ。他人に迷惑をかけない限りは、やってみろ、徹底的にやってみろ、やって傷ついて考えて、一歩た

くましくなって立ち上がる。そうして若者は大人になってゆくのではないのか。家庭も学校も企業も社会も、もっと若者にトンガることを許容し、「若いんだから、やってみたらいい」と、昔のようにおおらかに言って上げられたら、社会性を育むいい機会になるのではないのかとおもった。

楽観的に過ぎるかも知れないが、ちょっと感動を感じながら、講演を聞いていた。

## 2. アイデンティティの欠如とその原因

実は、長年教育の現場にいた私の父が2年前に亡くなる数か月前に、「今の若者にはアイデンティティが欠如している。ここに問題があるな」と、親殺しのニュースや荒れる学校、ニートなどのニュースを見ながら口にした。てっきり、父親はボケたに違いないと思った。しかし、父がなくなった後の2年間、この親父の言葉をかみしめた。青年たちが社会性を獲得できないことと、アイデンティティが確立できないことには、同じ原因が潜んでいるに違いないと思えるようになってきた。親父はきっとボケてはいなかったのである。

若者は、社会性を獲得する過程で、アイデンティティを確立しようともがき苦しむ。しかし、現代日本の多くの若者はその努力が報われないか、努力すらくじかれてしまうのである。若者がアイデンティティを確立しようともがき苦しむのは自然なことである。だれも一人前として認めてくれない少年・少女の時期を経て、ひとかどのヒトとして誰からも認めてもらえるようになりたい、と願うのは、社会の一員として自分が他のヒトにはない何かを提供できることを訴えたいからである。この訴えに成功すれば、「面白い奴だ(周囲を明るくする)」とか「頭がいいね(知能で社会の人を助けてくれる)」とか「英語がうまい(英語で役立つぞ)」とかいうように自分が社会に受け入れてもらえる大きなチャンスがやってくるのである。それが、いくつかの理由で、大きく阻害されているのが、日本の現状なのである。

教職課程の「教育心理学」に問題があるということはすでに指摘した。社会性のない教師が子供たちの社会性を育てないという問題である。原因は同じかも知れないが、子供たちは教室で強い斉一性圧力にさらされているのである。私の息子は、高校生のときに教師から他の生徒たちの前で「なぜ君は国語の成績が他の生徒より、飛び切りいいんですか? こういうことはみんなの迷惑ですからやめてください」といわれたそうである。息子は「ボクが悪かったんだ。先生にもクラスのおみんなにも悪いことをした」と言って、しょげていた。そして父親である私に救いを求めていた。私は、息子の学校での進路相談の機会に担任の教師にこの件の考えを思い切って切り出してみた。担任の教師は国語の担当ではない。学生時代は全国大会にも出場した陸上選手だったという。体育

会系であることに私は賭けたのである。「先生、この話についてどうお考えですか？ 競技会で優勝した子供には、よくやったとほめるのではないのでしょうか。うちの子は、全般に成績優秀とはいえませんが、小学校時代から言語能力だけは突出しており国語の成績だけはよいのです。そこしかとりえのない子です。国語の成績が他の生徒より成績がよかったら、ほめられずに、くさされてしまう、というのはどうにも納得が行きません。ほめてくれないまでも、黙っていてくれてもよかったのではないのでしょうか（私）」担任の若い女性は、父兄の思わぬ発言に、しばらく黙り、そして「私の場合、競技には子供たちを勝たせたくて送り出します。生徒が勝ては本人も私もうれしいです。教科でも同じだと私は思います。職員室での話題にしたいと思います」と言った。私はあわてた。「いや、うかつに取り上げられて、子供がまた攻撃の対象になるのはごめんです。体育会系の先生以外にはわかりにくいお話でしょう」と私。しばらく、教師は私を観察していて、「あの～、失礼ですが、教育関係の方でしょうか」と聞いてきた。「小学校や中学の運動会で一等賞になる子供がいることに反対する教員が多くて、子供たちに手をつながせて、一斉にゴールさせ、「みんな一等賞ね」という学校も多いのだ」と教員は憤慨して話した。「自分はあなたと同じ意見なのだから、同調してほしい。あなたは、もしかして、そんな変な平等主義がはびこる教育現場に疑問を抱く教育関係者なのではないか」と、はやる気持ちが伝わってくる。「いえ、大学の非常勤講師をしています、教育関係者といえるほどのものではありません」と私。このままでは、息子が、学内で多数を占めるはずの斉一性圧力の原因教員たちの餌食になると、私はますますあわてた。ええい、ままよ、「たまたま私の兄弟がこの学校で教員をしています」と防戦する。「えっ、どなたですか。男性ですよ」と教師。「いえ、姉です。嫁に行つて苗字が変わっていますが」と私。「誰ですか」と教師。「申し訳ありません。これ以上は勘弁してください」と私。実際、私の姉は、たまたまこの時期にこの高校で世界史の教師をしていた。何度も押し問答をしたが、議論はこれで終わった。

その後の様子では、このやり取りが効いたのか、息子が教師からいじめに会うことはもうなかったようだ。しばらくたって、年齢から割り出して、結局、私の姉が誰かをこの教員は突き止め、私の姉に事の顛末を語ったようである。学校教育の現場での斉一性圧力はぬぐいがたくきわめて重いものがある。社会性を持たない教師たちの身を守る方略が斉一性圧力なのである。個性的な子供たちをそれぞれに受け入れることなど、個性の複雑な組み合わせで出来ている社会の成り立つを理解しない人格=教師には対処しようのない仕事である。子供たちの個性（よいところ）を認めないという、とんでもない教育現場なのであ

る。個性は育たないどころか、教師によってくじかれてしまうのである。教師による児童・生徒に対する斉一性圧力と期を一にしているものに「いじめ」がある。子供たちのいじめの遠因を作るものは、教師特有のビリーフ性に基づく欲望の抑止と斉一性圧力（社会性が欠落したままに実行される）だろうとは私がにらんでいるところである。

学生たちに「正直な口バは疲弊する」という話をしたところ、どの大学でも約30%の学生が、自分が「正直な口バ」にされた経験があると回顧している。成長の過程で子供たちは身近な集団に加わることによって社会性を獲得してゆくのであるが、集団に居場所を見出すにはその集団に何がしかの貢献が求められる。社会性の未熟な純真な子供はすれっからしの集団のボスや兄貴分のワナにはまっていいように使われてしまう。「俺たちが好きなんだろう。やって来いよ。じゃなければ、もう仲間にしてやらないからな」と万引きなどの悪事を命じられたり、「俺たち友達だよな、小遣いを貸してくれよ」とお金をせびられたり、そこまで行かなくともバシリになってしまうことがしばしば生じているのである。マスコミで報じられたとおり、それに従順にしたがって、ついには自殺してしまった子供たちもたくさんいた。一方で、その理不尽さに気づいて、一切の集団に参加することをあきらめてしまう子供たちも多いのである。社会性が育つ機会がないのである。ましてや、自分が目立って、いじめ集団の餌食になるのは真っ平なので、トンガって個性を主張することなど到底ありえないのである。おとなしいが積極性のない子供たちばかりが増えてゆく。

つくづく、"その集団が善良であれば存在を許され、善良でなければ存在が許されない"という事実を子供たちが目の当たりにする機会が多ければ、子供たちの心に"善良な集団を選択する"という方略が芽生えるであろうに、と思う。われわれの子供のころの学校では、悪がきの集団は教師の拳骨の嵐を見舞われ、地域では大人たちの厳しい監視下に置かれた。年長の子供たちがズルをしてまじめな小さな子に負担がかかりすぎていれば、そのグループに分け入って厳しく指導した。多くの純情で幼い子供たちは、善良な集団がどこにあるかをすぐに知ることが出来、ここに加わることで社会性を獲得していった。善良でない集団を見分けるすべも次第に身に着けた。現在の教師にはそれらを指導するだけの時間はあっても能力がないのである。勘所が分からないので時間を費やしたところで解決できないのである。地域の親たちにもその習慣がなくなっている。

### 3. グループ学習活動

私は、かなり以前から、大学の教育にグループ学習を取り入れている。授業時間になると学生たちが黙って教室に入ってきて、いすに座り、授業が終わると、黙って教室を出てゆく、大人しい学生が多いことに気がついたからである。"彼

らに、大学で友人がいるのだろうか""授業で聞いた話題を侃々諤々友人と議論することなどないのではないのか"と心配や不安が高まった。

まず私が始めたのは、授業のはじめに大声で挨拶することだった。朝でも昼でも夕刻でも、私は授業の冒頭に大声で「おはようございます!」と叫ぶ。学生らの返す声は小さい。あまりに小さいともう一度挨拶をやり直す。学生らは照れくさそうにクスクスと笑う。この照れ笑いこそ教師と学生のぬくもりのあるコミュニケーションの第一歩である。挨拶をするようになってから、授業後、教壇に立ち寄って質問してゆく学生が増えた。シメたと思った。

つぎに私が始めたのは、グループ学習である。学校によって、とてもうまくゆくところとそうでない学校がある。地方出身者の比率が高い教室では成功率が高く、都会の子供たちばかりの教室はうまく行かない傾向がある。地方ではまだ社会性を育てる環境が残っているが、マンションやアパート暮らしの都会では近隣との交流もほとんどないので社会性の萌芽さえ育っていないようである。

グループ学習には批判もある。実習でもないのにグループ活動はないではないか、とか、グループ学習にすると各自が勉強せず誰かが犠牲になってしまう(正直な口バは疲弊する) などというものである。批判にもめげずに、頑固にグループ学習を進めている。私はグループ課題を発表するときには、「他人任せにすると、一人の勘違いでグループ全員が悪い成績になるぞ。それも自分の責任だぞ。自分が安心できるまでお互いに点検したから提出しろよ」と毎回怒鳴る。学生たちは"あっ、ホントだ。たいへん"とやっと感じて、放課後に皆で集まる相談を始めたりしている。グループで課題に取り組むのは楽ではない。連絡を取り合って、休日や昼休み、放課後に集まっては相談する。一人でやるよりも3倍も4倍も時間がかかる。最初は不平たらたらである。それでも、学期の最後には、「グループの課題は楽しかったです」「グループ学習のおかげで、大学で初めて友達が出来ました」「グループで討議すると一人では気づかなかったことに、気づかされたことが多かったです」というような、感想が聞かれるようになる。学生らは小学校のお遊戯くらいしか、グループ活動の記憶がないというのである。社会性を獲得できる10歳手前くらいには教師の指導を受けるグループ活動はなくなっているのである。いじめや学級崩壊は、教育実践としてのグループ活動がないところに起こっているのではないだろうかとは私は愚慮している。

そして、さらに私には、社会性が育たないところではヒトの知恵は育たない、と確かに思われるのである。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3\\_e921.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3_e921.html)

情報システムは、社会や社会的組織の仕組みがわからなければ理解できないし、

ましてや作成などおぼつかない。プログラマは階層構造をなすソフトウェアの完成形を予見して、多くの場合はそれを下位から上方に向けて記述してゆく。場合によっては上部から下位に向かって記述する。階層は数個から数万に及ぶ場合もある。階層構造の思考方法に習熟しない限り、SE やプログラマには決してなれない。文法を丸暗記してもプログラマにはなれないのである。その意味で社会性の獲得は私の授業の必須条件である。グループ活動は、座学中心の私の授業の不可欠な要素なのである。

グループ活動の大家と言われる方は別に多くいることは知られているとおりである。しかし、システム工学、情報社会学、情報組織学、情報デザインを教える私にとっては、やむにやまれぬ授業プログラムの一環なのである。

#### 4 . ブログ作成指導と組織論講義

今年、受け持った三大学 4 クラスの学生は合計すると春学期の半期だけで約 200 名になる。例年よりもやや少なめである。クラスごとに新しい試みは当然異なるが、全クラスに共通して今年に限ってはじめてのことは、2 つある。ブログ作成指導と組織論講義である。

##### (1) ブログ作成指導

かなり勇気の要る決断だったが、学生らにブログの作成に取り組ませた。学生たちに、思いっきりトンガってもらおうと決心した。

しかし、社会性は著しく低いままに大学に来てしまった若者たちのことである。いろいろと気遣うことは多い。まず、社会性が低いことは学生も自身で感じていて、何よりも引け目を感じている。「いいんだ、社会性が低いのは君たちのせいではなくて、君たちに社会性を育てる機会を与えなかった大人たちが悪いのだ」と言ってあげるのである。学生たちはホッとした表情になる。ネチケツを教えるふりをして、ヒトは被害者になったり加害者にならないように細心の注意を払って生きてゆかなければならないということを繰り返し教える。「道德」とか「倫理」とか言う言葉は禁句である。とたんに学生らは耳を閉ざしてしまう。「道德」とか「倫理」を教えた中学・高校の教師は、もっとも教育スキル低い教師たちであったことを彼らは知っているのである。数学や理科、国語や歴史など専門性の高い教科を教える教師は高い教育スキルが要求される。これらの専門科目を教えるスキルが十分にはない教師が「道德」や「倫理」に割り当てられている。馬鹿が教える「道德」「倫理」という観念が学生の耳をふさがせてしまう。せめて「情報倫理」などと目新しい言葉に置き換えて教える。ネット上での特殊性もそのついでに教える。自分の個人情報やネットに書き込まないこと、他人を名指しで批判することはネット上では禁止であることも教える。著作権も教える。そしてやっと個人のブログの立ち上げにいたるの

である。

学生は、歓喜の声を上げて喜ぶ。"やった、これでトンガって自分の書きたいことが何でもネット上でかけるぞ"と浮き足立つのである。私は、待てと叫ぶ。「君たちの親や兄弟は、君のブログを読むかも知れないぞ」「他の教科の先生たちにも私のクラスのみみんなのブログは教えるつもりなので、他の先生たちも君たちのブログを読むに違いない」と説明する。学生たちは、し～んとなって真剣なまなざしになる。加えて「もちろん、クラスメイトも読むだろう」と私は続ける。学生はお互いに顔を見合わせる。私はここぞとばかりに語気を強めて、「それだけじゃない、元カレや元カノジョも読んでいるかも知れないんだぞ」というと、教室内からは「ひゃー」というような悲鳴さえ聞こえる。社会性の獲得は、恋愛の感情ときわめて密接な関係にあるのである。

かくして、学生たちのブログは、普段のあの学生たちなのか、と思うほど、すばらしい哲学に満ちた記述が行われるのである。私は、thought leader's opinion としてのブログの記述を推奨している。たまには勘違いして、thought leader's opinion であるはずのブログを WEB 日記にしてしまって、テレビで見たアイドルがかわかった、などと言うような記事ばかり書く者もいるが、メールで、元カノジョが読んでいるかもよ、と警告を伝えると、あわてて、幼い記述を消して、哲学的になってゆくのである。カノジョやカレの前ではお行儀がよくなり、互いに預言者のように哲学的な自分を見せたいというのが恋する若者の心情なのである。トンガってみたいのは、誰からも認めてもらいたいから、という矛盾したハザマに若者はいて、見事に社会性をみがくのである。

ブログは社会性を磨く時宜にあったよいツールであると思っている。以前はホームページ制作がこれに該当したかも知れないが、ブログのほうが自己発現にとってより直裁的である。

## (2) 組織論講義

どの大学も今年初めて行ったもののひとつは組織論の講義である。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/8\\_600d.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/8_600d.html)

「社会は組織によって成り立っている」こと、「組織は定常流の実在でコンクリートで固めたようなものではない」こと、「組織はネットワークと階層構造という横軸と縦軸によって支えられ、また絡めとられている」こと、「ヒトは組織に貢献することによって対価と安全を保障されている」こと。「組織もまた所属するネットワークや上部組織に貢献することによって存在を保障されている」こと、「どんな組織にも理念や目的がある」こと、「その理念や目的が反社会的なものであれば、所属するネットワークや上部組織に守られることがないので、競争に敗れてやがて消滅する」こと、などを述べた。つまるところ、社会に貢献する活動を主たる目的とする組織以外は社会から排除されるのであり、ヒト

は社会に貢献する活動に参加することによって生かされているのであると言う説明である。

学生たちは、寡黙になり、下を向いたり、天を仰いで話に聞き入っていた。授業の後には「これからの人生が金のためだけかと思うと社会に出たくなかったが、そうではないことがわかって、気分が晴れた」とか「金ばかりが人生ではないとわかって、思わず涙がこぼれた」とかいう感想が寄せられた。これらのことを自分のブログに書いているのである。若者はパンのみにて生きることのむなしさを感じており、金でつられて生きるおろかさを知っているのである。某金満家がテレビ局の買収に失敗したのは、関係者の私利私欲を社会貢献と言い換えたために社会の反発を買って支持を失ったからなのだという例話もした。一部の金満家ファンの学生も含めて学生らの同意は得られたようだ。社会貢献しない活動や提案は社会の支持が得られないということである。

「社会に貢献するとは何か」の答えの仮説としては、「(多くの哲学者が言うように)ヒトは安全で健康に恵まれて文化的に生活が送れて、ヒトの子孫が繁栄すること(LOHAS)を究極の目的にしている。これを"生の維持と生の再生産"と言う」としてある。"これは私の仮説だから、別の考えがあっても良い、反論は大いに結構"と話すことにしている。

トンガって、トンガって、若者よ、もっとトンガって生きてみよう。社会に迷惑をかけるようならやめればよいが、迷惑なことではなければ、徹底してやってみよう。誰かが、君を認めてくれるだろう。その人は、未来の君の最良の伴侶かも知れないし、君の将来の雇い主かも知れない。周囲で認めてくれる友人が本当の友達だろう。少なくとも、私という君たちの教師の一人は、いつも、君たちのトンガりに拍手を送っていることを忘れないでほしい。

琵琶

---

## (5)個性と社会性

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/5\\_8182.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/5_8182.html)

2005/08/29

「社会性」と「個性」と言うものは、しばしば二律背反する概念のように考えられてきたのではないだろうか。個性のある者は社会性に欠如し、社会性の発



達している者は没個性であるという具合である。

しかし、これは本当だろうか。

私たちが直面している日本の社会的現象は、そのように単純なものでないように感じられる。社会性に富んだ人物ほど個性的であることにいつも驚かされる。広範な知識を持って人格円満な方ほど、他人の追随することのできない技芸に通じていたり、クラシック音楽や文人画に明るい一面を盛っていたりする。高尚な趣味と言うわけではないが、ひとかどの人物といわれる人はその道で突出してすぐれた能力を発揮している。一つでよいが、何かすぐれた点がなければ、社会はその人を受け入れないのではないだろうか。社会性を獲得するとは、とりもなおさず、身近な社会的集団（身近な組織）がその人格を受け入れるということによって磨かれて鍛えられ、そして、ついには証明されるものである。一方、身近な社会的集団（身近な組織）にすでに存在するすべての個性を上回る能力を満遍なく持っている若者がやってきたら、どうだろう。その集団は果たしてその若者を受け入れるだろうか。きっと反発し、いやな奴が来たとばかりに仲間に入れることを嫌うに違いない。どنگりの背比べの仲良し少年草野球チームに、プロの養成を目指す野球教室の優等生が突然やってきたようなものである。少なくともひと悶着は避けられない。それまでの組織のリーダーと陰に陽に一戦交えるか平和的交代を模索する必要がある。それまでのリーダーよりもぬきん出てすぐれていれば、平和的交代が可能であるが、大差がなければひと悶着が起こる。これを女性の地位向上に生涯をかけた市川房江女史は「出る杭はうたれるが、出すぎた杭は打たれない」と表現した。新たに参入する若者がそれほどはすぐれてはいないが、その少年が持ち合わせている一つ二つの個性と才能が既存の集団の中でバッティングしそうなライバルとなりそうな同等の人物がいたらどうだろう。よほど、うまくそのライバルと仲良くなる以外にその週棚の中に溶け込むのは難しい。いずれにしても、少年たちにとって、組織に馴染むためには、ひと悶着は避けられない。これを切り抜けてこそ、社会性を獲得するのである。これは、どうやら、少年たちに鮮烈な体験を強いる発達のためのイベントらしい。私もその体験をしてきたが、多くの大人の男性にとっても創だったに違いない。「青春時代が夢なんて あとからほのぼの想うもの 青春時代の真ん中は 胸に 刺（とげ）さすことばかり」というフォークソングがあったが、「胸に 刺（とげ）さすこと」の大半は、仲間と親密になりたいと思えば対立し激しく争わなければならないことだったのではないだろうか。たまたま、その少年のもつ才能が既存の集団の中でバッティングしないし、必要としているものであれば、集団は「面白い」とか「役に立つぞ」とか言って、難なく、受け入れるに違いない。しかし、集団の規模が大きくなるとどうなるだろうか。衝突する個性が多くなり、トラブルは避けられなくなる。少年たち

はそのトラブルに正面から立ち向かい、解決のためにいろいろな知恵を絞り、切り抜けてゆくのである。こうして、少年は周囲の空気が読めるようになり、社会性を獲得してゆくのである。

それでは、個性を持たない少年は、どうなるのだろうか。周囲の大人が、上手に（選択的に善良な少年の集団に）誘導しない限り少年たちの集団に「役立つ人」でも「面白い奴」でもないので、仲間には誘われることはない。少年は集団に入ってその中で社会性を磨くのである。まだ集団に入る前にはも社会性を獲得していないので、進んで仲間に入ることができない。大人たちの誘導で一度は仲間に入っても、個性のない子はやがて集団から脱落してしまう。集団に入れば、その集団の中での役割を求められる。多くの場合は、他のメンバーが持っていない何かの力を発揮しなければならないのである。個性が求められるのである。他のメンバーが持っていない何かの力を発揮したとき、初めてその少年はその集団の一員として公認されるのである。個性は集団参加への一步をいざない、集団に参加することによって個性は差だつのである。社会性の発達と個性の発達は表裏の関係である。

ここでは「少年」に限ってのべたが、少女たちの場合は、少年たちとはまた異なる複雑性を見せる。それは、別の機会に述べたい。少女たちは、少年よりも早く個性を獲得し、このことが集団への参加の仕方をより複雑にしているように見られる。

そこで、大人たちは悪意ある集団（たとえばいじめの獲物を虎視眈々と狙う陰湿ないじめ集団、万引きや親父狩りの犯罪集団など）を敢然として排斥し、善良な集団にわが子や教え子を上手に誘導し仲間にしてもらおうと腐心するのである。これは大変に手間のかかる仕事である。昔の親は、「すみませんね。うちの子をお仲間にしてあげてください」と近所の子供たちとその親たちに頭を下げて歩いたものである。この仕事の多くは、良し悪しは別として、かつては家庭にいる母親の仕事だった。教師も教室の子供たちの（休み時間の）行動を観察して、善良な小集団をうまく育てることに心を砕いてくださったものである。現代の親は、両親ともに忙しい。今は、「すみませんね。うちの子をお仲間にしてあげてくださいね」と言って歩く親はほとんどいないのである。教師も善良な小集団をうまく育てるなどと言うことは、指導要領には書かれていないし、大学の教職でも教えられてはいない。まして、休み時間に子供たちを観察するなんていうのは劣悪労働以外の何者でもないではないか、教師だって休養したいと思ってしまうのである。それに、多くの教師にとっては自身の体験にもないことなのである。特に女性教師は幼年少女青年期を女性差別の時代に育てられているので、不幸なことに「社会性の育成」の対象外におかれてきたのである。男性教師よりは大きなハンディを負わされている。

かくして、少年は、社会性を獲得するために個性を育ててゆく。個性を差だてるために、仲間を集うのである。

ところで、この「鐘の声」ブログから、特定のテーマのものを抜粋して、「特集」が作られている。私の会社のスタッフが作ってくれたものである。

<http://www.sciencehouse.jp/company/presblog.html>

「特集 2 心理、教育、社会性の発達」も収録された。

<http://www.sciencehouse.jp/materials/blog2.pdf>

ブログ「鐘の声」の「心理、教育、社会性の発達」が、評判になったからという理由らしい。なんだかこそばゆいが、大学教育ばかりではなく、社員教育にも直結するので、まあいいかな、と思っている。

琵琶

## (6) 昔あった「教育心理学の不毛性」の議論

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/6\\_9cb7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/6_9cb7.html)

2005/09/05

昔（2000年頃）「教育心理学の不毛性」という議論があったそうである。「教育心理学の不毛性」はとうの昔に分かっていたことになる。それにしても、対策や克服する提案としての決定打を耳にしないのはなぜだろうか。

当時の議論を知るすべはないが、その痕跡は下記のようなネット上の記事に見ることが出来る。

このテーマで書籍を世に送っていらっしゃる方もいるので、本来ならば、書籍を読まなければ何も申し上げるべきではないのだろうと思う。準備不周到のままの発言ははばかれるのだから、お叱りを覚悟で書かせていただく。

<http://souran.bur.hiroshima-u.ac.jp/Profiles/0320/0001592/report.html>

<http://www.win-3.com/sake/mori-1.htm>

<http://homepage1.nifty.com/sc/jspace/kinenkouen.htm>

<http://ce.tt.tuat.ac.jp/ML/sigce/msg00871.html>

インターネット上の痕跡から垣間見るそれぞれの考究にはすぐれたところが多く、到底私のとやかく言うところではない。いろいろな側面の問題が取り上げられ精緻な議論がされているように感じれる。

しかし、ニートなどの社会への非参加者の群を育てた「教育（小中高大院）の責任」については、明言されている部分は発見されなかった。もちろん、上記の人々は、個人的資質にすぐれた教育者であり、多くの立派な参加型社会人を育てた功労者で、社会への非参加者の群を育てた「教育（小中高大院）」の責任の咎は、これら以外の人々にあるのだと思う。

教職課程で学んだはずの「教育心理学」が教育現場に役に立たなかったという現実には「教育心理学の不毛性」という昔の議論の中で語られていたらしい。しかし、そこでは次のような問題は語られていなかったようだ。

(1) 学年制教育制度の限界

(2) 「社会性の発達」が含まれていない「教育心理学」

学年制教育制度の限界については、語る人が増えてきたと感じているが、一方の「社会性の発達」が含まれていない「教育心理学」の問題については、私はまだ聞いたことはない。大学の教職課程で教える「教育心理学」は大半がピアジェの心理学に依存しており、ピアジェの認知発達理論には「社会性の発達がない」という限界を私は指摘してきた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2\\_4ce5.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2_4ce5.html)

これらの限界を超えようとしている大学の先生方も少なからずいることも分かったが、まだ多勢に無勢である。

もう一度、「教育心理学の不毛性」という後ろ向きな議論ではなく、ニートなどの社会への非参加者をなくして、「市民参加型社会へ意気揚々と参加する若者を育てる教育心理学」の再構築を図りたいものである。

次回以後、折を見て、「社会性の発達」を教える大学人の書物や見解を勝手に取り上げてみたい。

琵琶

---

## (7) 狙われる「社会性の発達阻害」

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/7\\_f580.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/7_f580.html)

2005/09/08

社会性の発達が阻害されている若者が充溢している現代では、カルト教団、カルトビジネスに簡単に若者が取り込まれてしまう現実がある。

最近も、危うく、カルトビジネスに取り込まれそうになった学生（女子）からの相談があり、何とか思いとどまらせることができた。本人は、集会に出かけて感激したものの、何か引っかかるものを感じたのだろう。一人の秘め事にせず、私を含めたみんなに相談した。これがよかった。

この団体は「私利私欲だけでいいのか」と若者に迫って、「ボランティアで、時間外に教義のために農作業などの作業に従事しなさい」というものらしい。「私利私欲だけでいいのか」という言葉は、若者の心の底にある善良な思いをひどく刺激するのである。現代の健全な若者は「私利私欲だけでいい」とは到底思えないのに、小中高大の教育とマスコミは、私利私欲を賛美してやまないのである。乗っ取り屋が時代の英雄にさえなっているのである。「私利私欲だけでいいのか」とささやかれて、グラリとくる青年はむしろ正常かも知れない。

現代の若者は、「社会に貢献して、自分と家族の生存と安全を保障してもらう」という普通の社会的原理を大人たちから聞いていないのである。そんな当然のことをなぜ大人たちは言わないのか。と常にどこかでのどの奥に突き刺さった小骨のように疑問が続いているのである。

こんなとき、その団体の勧誘員は、「私利私欲だけでいいのか」とささやいたのである。社会経験もなく、社会の仕組みも社会に対する感性さえ形作られていない女子学生が、「あぁ、いい人がいる。いい人たちがいる」と勘違いして、感激して舞い上がってしまっても不思議ではない。

舞い上がっている若者を洗脳するのはわけがない、「婚姻制度を廃止して原始共産制を現代に再現するために、ボランティアで働きなさい。稼いだお金は、わが団体（実は株式会社）に寄付しなさい」と畳み込むのである。彼女は土壇場で「で、私はどうやって生活のすべを手に入れればいいのでしょうか」と小さな声で聞いてみたが、大声で教義のすばらしさをまくし立てられて、それ以上の追求は出来なかったというのである。彼女は就活がうまく行かずに悩んでいてうっかりこの団体のメンバーに相談してしまったのに、肝心のその返事が得られなかったのである。

「ボランティアで働きなさい。稼いだお金は、わが団体（実は株式会社）に寄付しなさい」とは、ずいぶんな話である。この会社はもともと建築屋だったが、カルトビジネスにじわじわと転向したらしい。このカルトビジネスを、彼らはあるところで「すばらしいビジネスモデルである」と自画自賛している。幹部は教義に身を投じているのではない。あくまでもビジネスとして、信じてもし

ない教義を流布し、叩き込み、洗脳して、信者の身から骨の髄まで搾り取ろうというビジネスモデルである。法的にどうかは知らないが儲からないはずがない。

教祖 A が逮捕された「×××真×教」(後継組織=「ア×フ」)も「私利私欲だけでよいのか」と若者を迫った。教祖 F が逮捕された「法の×三××」(後継組織=「よろこび家族××」)は逆に「私利私欲」をあおりたてて誘い込んだ。社会の実体験をもっていたり心の社会性を発達させたバランスの取れた若者であればそれらのまやかさに騙されるはずはなかつただろうにと悔やまれる。

「超心理学研究(=反オカルト、反カルト研究)」の専門家が身近にいたので、頼もしい。この先生にも大いに助けてもらわなければなるまいとも思う。

今、正常に社会性を育成する教育が必要である。若者が簡単にカルト教団やカルトビジネスの餌食にならないように、・・・。

琵琶

---

## (8) 超える努力

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/8\\_7e26.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/8_7e26.html)

2005/09/13

### 1. 知性なき丸暗記と超える努力

戦後の教員養成の教育は、主として大学で行われた。大学の教育心理学は、時代の制約を受けて「子どもたちの社会性の発達」を捕らえることのなかつたピアジェの心理学だった。その教育は今も続いているのである。

このことは、以前、私のブログ(「心理、教育、社会性の発達(2)--「教育心理学」の限界と希望」)に書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2\\_4ce5.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2_4ce5.html)

教員は「子どもたちの社会性の発達」を教えられていないので、「社会性の発達」を促進することなど出来るはずがない。「社会性の発達阻害」の被害を受けた子どもたちが成長して大学に入り大学の教員となり、「社会性の発達」を知らぬままに教師になるべき学生たちを(世代を変えて)教えるのである。戦後は60年を経過して、「社会性の発達」を知らない教員は2巡して、いわば系統栽培を受けてますます純化し確信に満ちているのである。子どもたちは、自然の摂理の

ま、個性を汨濫させようとするし、社会性の獲得を目指して教師に反抗的な行動を起こすのである。教師は、学級崩壊、イジメ、自殺などの危機にいつも瀕している。教師に残されている手段は、子どもたちに斉一性への圧力をかけ、訓育し、おとなしく、反抗しない子どもたちに仕立てることである。子どもたちは本来外に向かって汨濫させるエネルギーを内向させ、個性の芽を自分でくじいて、社会とのかかわりを出来るだけ少なくしようと身を縮めてしまう。教師たちによる斉一性への圧力こそが、不登校、イジメ、学業不全、退学、ニートを大量に生み出した源泉である。子どもの個別の人格や家庭の問題にして、その責任を逃れることは出来ない。教師たちは、なぜ「斉一性への圧力」などという心理的暴力を振るうことになったのかは、子どもたちの天性にある「社会性の発達」を捕らえて、精一杯伸ばしてやることを教えられていないという点に起因する。教師もまた被害者ではあるのである。

この実情を変えようとする努力は大変なものである。

まず、入学してきた学生は、生きてゆく最大の戦略を「知性なき丸暗記」に頼ってきているのである。「丸暗記」があればこそ、大学の狭き門を突破できたのである。この「知性なき丸暗記」自体、実は社会性の発達阻害に起因していることも、私はすでに述べた（「心理、教育、社会性の発達（3）--「記憶」の社会性」）。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3\\_e921.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3_e921.html)

「知性なき丸暗記」は、見かけよりもずっと根深いというのが、私の結論である。

この学生たちに、感じたこともない、聞いたこともない「社会性の発達」ということを教えようとするとうどうだろう。出来のよい学生は何を勘違いしたのか単語帳を取り出して、書き込むのがせいぜいである。「用字用語の意味を覚える」ための学習方略なのだ。心の向きをかえるなどと言うことに思い当たることはない。何とか、気づかせようと大学の教員が苦心惨憺すると、「じゃ、答えを教えてください」と言ってくる。彼らは、「正解を丸暗記すれば、難関も突破できる」と教えられ、実際に難関と言われた大学の門を通過してきたのである。どこに間違いがあるのか、と彼らは憤激するのである。「正解を教えても意味はないから、自分で考えてみてください」などと大学の教師が言えば、「××先生は、教え方が下手で、答えも教えてもくれなかった」と、教務に告げ口したりするのである。はやりの「学生による授業評価」では、その大学教員に組織的な悪評が投げられたりする。同僚の先生方もたいていは「社会性の発達」とか「知性なき丸暗記の克服」などということには冷淡なので、「もっとスマートに教えればいいのに」などと当該教員の評価を下げているのである。

当該教員の学内評価が下がれば、学生らは敏感にこれを知ることになり、ます

まず自分たちの「知性なき丸暗記精神」と「社会性の獲得忌避」を正当と確信してしまうのである。

常勤の大学教師ならばともかく、こうして、非常勤の大学教師はたちまち失職してしまう。常勤の先生方も意気阻喪して、宗旨を変えるかいずれは大学を去ることになってしまうのである。

このような逆風の中で、「社会性の発達」を教えていらっしゃる先生方には、驚嘆を持って敬意を払うものである。

## 2. 超える努力の人々

たまたま手元にあった本を今回は取り上げる。これは、「社会性の発達」を取り上げない大多数の「教育心理学」の逆をゆくものである。なお、この本の著者らは、「子どもの期間」を乳幼児期から青年期までの期間と捉えている。

堀野緑,濱口佳和,宮下一博編著,「子どものパーソナリティと社会性の発達」,北大路書房(2000年)

### 第1部 子どもの発達と環境

第1章 子どもをとり巻く人間関係

第2章 子どもをとりまく社会・文化的要因

### 第2部 子どものパーソナリティの発達

第3章 自己意識の発達

第4章 自我発達-精神分析的発達理論の視点から

第5章 達成動機の発達

第6章 原因帰属の発達

第7章 価値観と性役割の発達

第8章 パーソナリティ発達上の問題に対する支援

### 第3部 子どもの社会性の発達

第9章 遊戯行動(遊び)の発達

第10章 道徳性の発達

第11章 向社会的行動の発達

第12章 自己制御の発達

第13章 社会的問題解決能力の発達

第14章 ストレス対処方略の発達

第15章 社会的不適応児に対する支援

かつて、私は、パーソナリティ(アイデンティ)の発達と社会性の発達は表裏の関係にあると述べた(「心理、教育、社会性の発達(5)--個性と社会性」)。



[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/5\\_8182.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/5_8182.html)

内容は、見事に符合するようだ。

また、私は、異性を意識する時期と社会性の発達の時期はシンクロナイズしていることも述べている(「心理、教育、社会性の発達(3)--「記憶」の社会性」)。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3\\_e921.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3_e921.html)

この点についても、別の角度からこの本は取り上げている(「第7章 価値観と性役割の発達」)。

我田引水かも知れないが、わが意を得たりと感動さえ感じた。

この本は、18人の分担執筆である。すばらしい先生方なのだろう。

とはいえ、日本の心理学の世界には20-40の学派があり、優劣と覇を競っているそうである。堀野先生らがどのような学派に属するのかは、門外漢の私にはさっぱりわからない。お会いしたこともメールを交換したこともない。機会があれば、お目にかかって、ご指導を仰ぎたいものと願うものである。勝手な引用をいたしましたことを、なにとぞお許しいただければ幸いである。

別の折には、別の先生がたの努力を取り上げる予定である。

琵琶

---

## (9)急増する小学生の教師への暴力

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/9\\_c332.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/9_c332.html)

2005/09/23

急増する小学生の教師への暴力--心理、教育、社会性の発達(9)

本日(9月23日)の朝日新聞朝刊は、一面左の記事で大きく「小学生の校内暴力--先生相手 急増」を取り上げた。文部科学省が昨年度(2004年度)の調査結果を公表したことに関する記事である。小学校の校内暴力は全体で27%増、内訳では子供同士や器物破損などの増加は10%だったものに対して、教師に対する暴力は33%増と突出している。

指導が成功すれば「暴力」としての届出がないのが通例なので、おそらくはこの数は氷山の一角であろうとは記事も指摘している通りである。

個々の事例の背景などについてはいくつか例示があったが、いかにも歯がゆい内容である。新聞という立場ではこれ以上を求めることは困難なのも分かるが、だれも本質をついたコメントができていない。洞察力のある人物にたまたまインタビューできなかつたということか。

むしろ問題は文部科学省の下請けで調査した調査会社の資質なのかも知れない。個々の事例を調べただけでは、本質は分からない。分からないままに調査しても得られるものは少ない。調査しないよりもましではあるが。

調査の軸（家族構成別、年齢別、過程外幼児教育の有無と量、・・・）は、教育経験豊富な洞察力のある人物が発見しない限り、調査の対象にすらならないからである。

私の父の顔を思い浮かべてみた。85歳でなくなったが、生きていれば、まもなく88歳だったろう。30歳台の前半で小学校の校長になり、市内の小学校を転々とした。若い教員だった頃に終戦を迎えていた。終戦直後、荒れる子供たちをなごませようと農家の父兄にお願いしてタネをいただいて子供たちと一緒に校庭に花を咲かせたのがはじめて、各地の小学校で「花の校長」と呼ばれるようになった。クラスや班ごとに花の見事さを競った。晩年は自宅で菊を育てて、展覧会に出品することを生きがいにしていた。彼だったら、現在の小学校の荒廃をどう見るだろうか。

彼は死の病に伏していたある日、ニートや親殺しのニュースを見ながら、「彼らにはアイデンティティの確立が見られないな」と強く言ったことが思い出される。一瞬、私は父がボケたのかと思った。その後、良く考えると、パーソナリティ（アイデンティティ）の確立なくしては社会性の獲得がない、という青年の発達の2つの分けがたい特徴を言い当てていたことに気づかされたのである。ニートや親殺しの青年たちの社会性の欠如は誰の目にも明らかだった。その原因を言い当てて取り除こうという声はなかったものの、誰もがその現象については言いはやした。父は、青年らのアイデンティティの確立を助けなければその社会性の獲得が現実化しないということに、強い思いを抱いたのだった。これは、まだ父にはかなわない、と私は思った。

この思いを抱きながら、私は個性と社会性について、過去の記事に書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/6\\_9cb7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/6_9cb7.html)

教員たちには気の毒だが、「いじめ」「学級崩壊」「校内暴力」などは、社会性の発達を阻害する教師起因性であるとも書いた。教室が安定せず、不安定が生ずれば、教師は防衛上、子供たちに斉一性の圧力を大きくしてゆく。子供たちは本能的に（ウソでも）自分を受け入れてくれそうな仲間を探して、教師の届かないイジメグループに接近してすぐにその餌食になってしまうのである（「金もってこい。そうしたら仲間にしてやる」「俺たちは仲間だろう。仲間が

大事だったら、万引きしてこいよ」・・・)。「仲間にしてやる」というエサは、成長期の子供たちや青年たちには抗いがたいものである。バカなことと言わな  
かれ。かく言うあなたも、どこかに似た記憶があるのではないだろうか。イジ  
メるな、イジメグループに接近するな、余計なことをするな、と斉一性の圧力  
が強まれば強まるほど子供たちの言い知れぬ反抗心が湧き上がってくる。理屈  
では説明のできない反発である。子供たちは自分の個性を認めて受け入れてく  
れる場を求めているのだ。個性を殺すことを求められ、かつまた優劣の比較(「か  
けっこはボクのほうが速いよ」「歌は私のほうが上手でしょ」・・・)を禁じら  
れた子供たちに理論で反論するだけの力はない。教師の教育理論の前に屈服す  
るしかないだろう。しかし、それでも承服しがたいものは承服しがたいのだ。「ボ  
クたちの話を聞いてくれない」「教え方がヘタ」「何を言ってんだかわかんない」  
というとてつもない言葉が子供たちの口から吐き出される。教師はただただ逆  
上してしまうのである。自分が愛してやまない子供たちから、教師に向けられ  
た侮蔑の言葉だ。「私の気持ちになぜ分からないの」というわけである。教師以  
外の人たちにその苦痛と苦悩を分かってもらえるだろうか。教師たちの絶望感  
は深い。教室の秩序を維持するためには、子供たちに対する斉一性の圧力をま  
すます強めることになる。強圧によって、子供たちを押さえ込むことに成功す  
る"有能な"教師は多いが、押さえつければ何かのきっかけで爆発する。学級崩壊  
である。いま教師は学級崩壊と戦っている。学級崩壊を避けるためには、子供  
たちの自由な結合を禁止して、人間関係を築かせないようにアンテナをカメレ  
オンの目のようにめぐらせながら、子供たちの共謀を防止しようと躍起である。  
しかし、武力で制圧された民族がテロとゲリラで抵抗するように、子供たちは  
仲間を募って教室をひっくり返してしまうことをあきらめるかわりに、突然教  
師に殴りかかったり、机や椅子を投げつけたりするようになるのである。教師  
に向かって刃物を振り上げる子供までいる。「校内暴力、とくに教師に対する暴  
力」が増大しても事の成り行きの通りで当然なのではないのだろうか。

原因は取り除かれることなく放置され、何の手当てもされず、むしろ、悪い要  
因を増加させる「斉一性への圧力」を強める技術だけは教員の世界の中だけで  
蓄積され磨かれてゆく。たいへん恐ろしい現実である。

教員養成の責を負う大学をはじめとして教育委員会、教員の各種研究会のリー  
ダの皆さんなどに、ぜひとも「社会性の発達」に関する知識と教育技能を現場  
の教師の皆さんに教えていただきたい。現場の教員の多くの皆さんは、およそ2  
世代にわたって、「こどもたちの社会性の発達」という成長段階を知らされずに  
来てしまった歴史的被害者なのである。

教師の皆さん、子供たちに斉一性への圧力をかけるのをやめよう。子供たち一  
人ひとりにある同じではない長所をそれぞれに認めてあげよう。子供たちのと

んがりたがるキモチを大切にしておいて、それを受け入れてあげよう。教室の中でよい仲間が互いに作れるように手助けしてあげてください。イジメグループよりももっと楽しくて有意義な仲間がいることを自然に見つける教育の場を創造してあげてください。それが愛するあなたの子供たちにできる教師の勤めではないだろうか。暴力を振るう子供は、何かを長い時間、押しとどめられ、くじかれています。くじかれていますものに、心の添え木を与えてください。傷が癒えて子供らしく元気にいろいろな夢を膨らませ、語るのを聞いてあげてください。適切な友達付き合いができるように目配りと手助けをしてください。子供たちは友達付き合いもまだ大人の手助けと誘導を必要としている。「共同体成立の条件(\*)」を子供向けに少し書き換えると次のようになるだろう。

- ・自分のことは自分でできるように
- ・一人は、一つ以上のことで仲間からほめてもらえるように
- ・仲間は互いに助け合うように
- ・仲よしグループはクラスや学校、地域みんなの祝福が受けられるように

教科指導とは関係ないことのように見えて、社会性の発達に驚くほどの認知発達を促す良薬であることも体験してください。

研究者の皆さん、教育心理学にはピアジェの認知心理学だけでは足りないのです。発達心理学や社会心理学の成果を是非とも教育の現場にも届けてください。

\* 共同体（組織）成立の条件

- ・自分のことは自分です。
- ・一人は、1つ以上、仲間の役に立つ。
- ・仲間は互いに助け合う。
- ・共同体は、社会に貢献する。

私は、目立たないしがない大学の教員にすぎない。小中学校の教育は専門ではない。素人が余計なことを言うなどのお叱りはごもっともである。教育をめぐる素人の「言説」は、何かと現場に混乱をもたらすものとして、大変嫌われている現状も理由なしとはしないと私も同意している。

しかし、大学の教壇に立つと、まさしく「社会性の発達阻害」「パーソナリティの発達阻害」の弊害を抱えた青年男女の大波が押し寄せてくる。グループ研究に取り組みせようとする研究の方法を教える以前にやるべきことが多すぎる。

仲間同士の会話を成立させることに時間と労力の大半が必要である。「記憶（認知）の社会性=知識・認知の高度化構造化」が欠如しているために、知の戦略としては「知性なき丸暗記」という戦略しか持ちあわせていない学生に、発見的研究などできるはずがないという現実にも直面する。大学の教員の多くは、このことに気づくとたいていは発見的研究の方法を教えることすらあきらめてしまう。事実、ほとんどお手上げである。半年の講義期間の十数コマの内の貴重な数コマの講義時間を割いたとしても過去20年間近くの教育をやり直すことなどできこっないではないか、と云うことである。

それでも、私は、グループ活動に固執し、学生が泣き出すまで、議論させる。そうしているうちに稀に「知性なき丸暗記」の頑なな殻が少しだけ溶けてくることもある。いつもいつも成功するわけではない。成功することもあるという程度である。えぐい、きびしぎる、教えることが高度過ぎると学生からは非難されている。そんな声は承知のうえである。負けてなるものか、と日々教室に向かう日常である。

大学の教員には大学の教員としての踏ん張りが必要であることは十分に認めるが、子供たちの成長にかかわる20数年の全体のプロセスを抜本的に改革しない限り、社会では役に立たない「知性なき丸暗記」の子ばかりが成績優秀と褒め称えられて社会に出てゆき、社会性が欠如しているがゆえにミスマッチ退職と再就職困難に直面してニートに転落する。この子供たちを救うことはできないのだろうか。

ちなみに、単に私の授業に出ていたことがあるというだけのつながりで私のところに相談に来る卒業生たちを見る限り、「ミスマッチ退職」とは「職種のミスマッチ」が原因ではない。「社会組織というものへのミスマッチ」すなわち「社会性の欠如ゆえの脱落」なのである。本人も社会に出て初めて自分が社会に受け入れられない人格であることに気づいて愕然とし、現実の社会に絶望してしまう。仮に心奮い立たせて職種を変えて再就職運動をしてみても、当然「再就職困難」となってしまう。そうってからでは、救済は困難を極める。

もう、このような不幸を再生産しないよう、関係者の皆様の英知とご努力を心からお願いする次第である。

琵琶

---

## (10) 気がつけば全般的学習困難と学習障害

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/10\\_737c.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/10_737c.html)

2005/10/15

気がつけば全般的学習困難と学習障害--心理、教育、社会性の発達（10）

今は、出かける直前の時間を利用して、この記事を書いている。

本日（10月15日）は、某大学で「情報教育担当者交流会」が開かれる予定である。この交流会は、事実上、「情報教育」に携わる教師たちの教育実践技能の向上を目指す研修会というおもむきなのだが、この大学が「情報教育」に取り組み始めてから、ずうっと続いている。

私も2人いる発表者の一人である。私の担当テーマは「Blogを使った実践」という内容である。情報教育におけるブログの活用という内容である。会の趣旨からすれば、教育技能の経験交流が主たる目的だが、副題には「社会性の獲得と情報教育」と付けた。問題意識の一端を示しておきたかったからである。

他人は、私にそのような問題意識を期待していないだろうが、万一質疑の中で、触れられるチャンスがあればいくらか詳しく説明することにしよう。私は、一介のシステム屋の親父で、実用技術に関する経験知識を期待してたまたま非常勤を頼んでいるというのが、関係者の偽らざる考えだろう。残念だが、学生たちの心の問題や将来を心配する普通の教師の一人であることはあまり期待されていないに違いない。

25年前、電算機学校の卒研指導員、通産省関連の技官たちや経営指導員に対する情報教育を頼まれた。そして9年ほど前からは大学の教壇に立っている。若い学生たちと交流することは楽しくて、嬉しくて夢中に過ごしてきたと言ってよいだろう。現在通っている大学は3つ。4つの種類の講座を合計6コマ担当している。来年は6種類8コマになる。巡ってきた大学は都合5大学になる。楽しく過ごしているうちに、昨年あたりりから、ふと気がついた。いままで見過ごしてきたただけだろうか。それとも現実のそんな学生が徐々に増えたのだろうか。おそらく、その両方なのだろうと思う。

気がつけば学生たちに広がる全般的学習困難の大海であった。はじめ、某M大学の情報基礎の学生たちにその傾向があることに気がついた。T大学の学生にも違った現れ方をしているものの同じ問題を発見した。H大学やK大学にも少数派であるものの同じ問題を抱える学生がいることに気づいた。振り返ってM美大の学生たちは、その傾向が顕著だった。現れ方の違いやその強弱については、それぞれの事情が加わっているが、じわじわとその範囲が広がっていることが感じられる。学生個々のその姿はまさしく学習障害様 learning disorder(LD) like

である。

学習障害 learning disorder(LD)は定義から見ると先天的脳疾患の一種であり、1%未満の子供が該当するものである。学生たちが陥っている学習困難は、症状は学習障害にきわめて類似しているにも関わらず、きわめて多数存在している。今、ざっと思いめぐらせてみれば、私が抱えている約400名/年程度の学生たちの90%程度が何らかの問題に該当する。これは、先天的なものではあるまい、と私は思う。後天的なもので、それぞれの学生の一生においては一時的な現象、いわば「仮性の」「学習障害」なのではあるまいかと思う。本来の学習障害と区別するために、仮性の学習障害と言う意味で、私はあえてここで「学習困難」という言葉を使用することにする。

本来の学習障害がもつ特徴は以下の通りである。

現在の学生の多く(おそらく90%程度)は、酷似する特徴のいずれか一つは持っている。

わたぼうし、"学習障害",音楽の部屋,

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/melody/learning.htm>(電子媒体、20051015現在)

---

## 学習障害の特徴

### 話すことの難しさ

話を聞いて理解することが困難です。

「いつ・だれが・どこで・なにを・どうした」などの文脈構成上の基本的な要素が欠落し、人が聞いてわかりやすいように話をするのが困難です。

(事柄や順序を整理して話すことが苦手です。自分の経験を説明することが苦手です。)

聞きもらしが多く、会話も一方的で話題がとびやすいことがあります。

### 読むことの難しさ

文字や文章を正確に(意味をとらえて)読むことが困難なことがあります。

本を読んでいるときに、どこを読んでいるのかわからなくなる。

問題なく話せるのに、似た文字の弁別にとまどったり、行をとばして読んだり重複読みをしたりします。(勝手に語尾を読み替える)

### 書くことの難しさ

字を読んで理解できるのに、書字能力が困難な場合があります。

ひらがな、カタカナ、漢字が、左右、上下が反転することがあります。(鏡文字)

漢字に誤字が多いこともあります。作文や日記など、考えて書くことが苦手です。

学童期には、板書が苦手で、自分で書いた内容が理解できません。

#### 聞くことの難しさ

集団の中での指示が理解できません。(指示を忘れて何度も聞き返します。)

2つ以上の指示は困難です。

話を聞く時の「注意の集中」が持続しません。(話言葉中心の一斉授業の内容が聞き取れません。)

(因果関係など)複雑な会話は理解困難です。

#### 計算や推論の難しさ

数の概念が身につかず、数系列の規則性などが困難です。

学童期では、足し算や引き算、くり上がりの計算などが苦手です。(短期記憶の障害のため、くり上がった数を忘れるために起こります。)

筆算の桁がずれる間違いも多いです。

文章問題も苦手です。(問題を理解して論理的に解決する力が乏しいために起こります。)

図形の特徴や概念がつかめない。(地図の見方が理解できない)

時計や単位が理解しにくい。

移動教室や、ロッカーの場所が、なかなか覚えられない。

#### 運動動作の難しさ

はさみの使用やボタン、ひも結びなど、手先が不器用なため、細かい作業が苦手です。

手足の動きが不自然なことがあります。(バランスが悪く転びやすいこともあります。)

縄跳びのような前進の協応動作が困難です。

音楽の拍子をとるのが苦手です。

#### 行動の自己調整の難しさ

学童期には、授業中に立ち歩く、ぼんやりする、私語が多く、話が聞けない...ことがあります。

順番を待つこともが苦手です。

気に入らないことがあると我慢できず、乱暴な行動をとることがあります。

一つの話題にこだわり、同じ質問、同じ話題を繰り返します。

表情が乏しく、人見知りしてその場の環境になかなかなじみません。

#### 対人関係の難しさ

相手の思いや感情を考えて、行動することが困難です。(人の嫌がることを言ったり、わがままを言ったりするため、自分勝手だと思われがちです。)状況判断



が苦手です。

人と関わる時の基本的な挨拶や礼儀が身につけていないことがあります。(これは、場面理解困難のために起こります)

1 「学習」というと「学力」を思いがちですが、私は「学力」に限定せず、「生活していく上で必要な技能を習得していく力」と考えた方がいいと思います。

2 学習障害の診断で間違いやすいのが、軽度の自閉症、アスペルガー症候群、軽度の知的障害です。これらの障害は「学習障害」とは指導方針がまったく違うため、慎重な鑑別が必要です。また、学習障害と密接な関係にあるものに「注意欠陥多動性障害 (ADHD)」があります。注意の集中を続けることが難しい障害です。学習障害の子どもたちのおよそ半数以上は同時に ADHD を持っているともいわれています。障害の鑑別も必要ですが、目の前の子どもたちにまず気を配ってあげることが忘れずに...。子どもたちがどのような援助を必要としているのかを重要視してください。そして、具体的な援助方法を考え、実施していくことが最も大切でしょう。

これらの特徴のいずれか1つを持つ学生が広範(90%程度)に存在することは紛れもない事実である。しかし、それほど多くの若者のすべてがこの種の疾患をもって生まれてきたとは考えにくい。大部分は後天的なものであろう。

10年ほど前、現代の若者が、階層的な概念構成を不得意としていることに気がついた。メタ論理がせいぜい2-3階層しか構成できないし、理解できないのである。

一方、システム開発の現場では、プロといわれるためには訓練によって最低でも1000階層程度の多層化構想のある概念構成物を自らの脳内に構築できなければならない。さもなければ、システムの設計もプログラミングもできない。多くの技術者は2-3000階層をもっている。スーパープログラマーと呼ばれる人たちは約10000階層の階層構造を持つ。トップダウンに作り上げられた階層構造を下から積み上げるように(逆順に)プログラムは書かなければならない。一番下の階層から書き始めて一番上の階層を書き上げる作業は、一気に行われる。これに対応する概念構成物があいまいであったり、記憶が途中で薄れてしまえば、書き上げることはできなくなる。概念構成物のしっかりした記憶を持ち続けるということは、まず必要な概念構成物を作り上げることができなければならない。

以前の若者は、それをわけなく習得し、有能なプログラマーに育っていった。しかし、個人的観察の範囲では、10年ほど前から、そのような概念構成物を作り

上げること、それを記憶しておくこともできない若者が過半を越えたのである。物事を並列に並べてみることはできるが、階層化してしまうととたんに理解できなくなる、もちろん記憶することなどできないという若者である。これらの若者は、思考が浅くて、知恵が働かない、言われたことを反射的に実行することはできても、先を見込んで作業手順を組み立てることができない、などの困難が伴っていた。私は、これらの若者たちの有様を「一種の記憶障害」と呼んでいた。いま、気づいてみれば、その姿は、もっと大規模で困難の領域は広い。単なる記憶障害だけではない。学習困難、いや認知困難なのである。

システム開発の現場や教育の現場では「計算や推論の困難」は目立つが、こればかりではない。聞こえているのに理解できない「聴覚認知障害様困難」や見えているのに理解できない「視覚認知障害様困難」もある。たとえば、「6 ページ目を開いてください」などの簡単な説明も教師の口から出るものについてはまったく理解できない学生がいる。文字や絵で示されたものは理解する。文字や絵ですまない場合は、いちいち、隣の学生が、教師の口真似をしてその学生に伝える。隣の学生が教師の口ぶりをオウム返しにすれば、よくわかるのである。小中高で彼が体験した何かを原因として、壇上に立つ人物すべてに対する心理的防御反応がおきているのかも知れない。(教師の斉一性への圧力への心理的防衛反応だろう)

これまで、私は、「社会性の未発達」ということを問題にしてきた。「社会性の未発達」ならば、大学でも発達支援ができるだろうという思いもあってのことである。しかし、そのほかの発達不全についても対策を強化しなければならないのである。

ブログの書き方、学生への教え方に習熟することももちろん大切であるが、大学の教師が教科を超えて、手を結び、学習困難者にたいする支援が必要である。

文部科学省は、学習困難と学習障害をややあいまいにかつ包括的に取り扱い、定義し、対策を述べている。

文部科学省,"小・中学校におけるLD(学習障害), ADHD(注意欠陥/多動性障害), 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)", [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/16/01/04013002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/01/04013002.htm)(電子媒体、2005/10/15 現在)

なかなか見るべところも多いが、私は、小・中学校ばかりではなく、高校でも大学でも、その成長に段階に応じた対処を実践すべきであると考えている。

先天性か後天性かなどの区別も必要である。90%もの児童生徒学生を特別学級に入れることはできない。普通教育で行われるべき対策が必要である。大学で

は、これまで、それらの対策が必要とは思われてこなかった(「小学生ではあるまいものを」など)。しかし、今は、(小学校では対処してくれないので)小学校の分まで対処が必要な時代なのではないだろうか。

機会があれば、どこかで存分に語ってみたいという衝動に駆られているところである。

琵琶

---

## (11)「出された課題に正解が書いてない」(?!)

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/11\\_a925.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/11_a925.html)

2005/10/21

「出された課題に正解が書いてない」(?!)--心理、教育、社会性の発達(11)

内心は、怒りで一杯だが、これが現実というものである。

昨日、ひとりの学生からのメールを受け取った。おそらく、これは氷山の一角であろう。むしろ、堂々と質問してくれたことを感謝しなければならないのかも知れない。他の何人かの学生は、陰でこそこそと「先生は、課題の正解も教えてくれない」などとうわさしているだけなのだろうと思う。実際に、それぞれの大学で出回っている「裏シラバス」や「学生評価」(匿名)の自由記述欄には、そう書かれていることが多い。

これらの学生の言い分は、「まず、正解を教えろ。それが分かれば課題に丸写しする」というものである。なるほどそれならば満点間違いなしである。昔は、たとえ、内心でそう思ったとしても、そう思う自分が情けなくて恥ずかしくなったものだった。しかし、今の大学の1割程度の学生は、「課題を出すときには、正解を教えてくれ」というのである。しかも、そのことに少なくとも罪の意識はないようだ。「恥」と言うものがないかのようである。

「丸暗記」「丸写し」のどこが悪いというのか、と言わんばかりである。本人たちに悪いことをしているという感覚はまったくないのである。

もちろん9割の学生はそんなことをしない。立派な学生が多いのはもちろんである。少数派の学生が「正解を見せないで課題を出すなんてひどい」というのである。

学生の名誉のために、学生のメールはここに引用しない。学生は、他の数人の

仲間が聞きにくそうにしているので、「勇気を持って」「(理由は分からないが、たぶん)しかられるのを覚悟で」、代表して質問したに違いない。本人には、勇気ある行為はほめてあげよう、しかし、その考えは間違っている、と返信した。その後、そのクラスの学生全員に、そのやり取りを隠して、次のようなメールを出した。私の苦悩が学生たちに伝わるのか・・・? でも、彼らを信頼して、真実を直裁に語ることにしよう、と私は考えたのである。

---

琵琶クラスの皆さん

琵琶先生から

創造的知性へ

--「知性なき丸暗記」「考えなしの丸写し」からの脱却

琵琶先生の講義録を見ると、今出ている課題の答えは書いてありません。

このことを説明しておきます。

不思議に思った人はいますか。---「当たり前!」と思う人が多数派のようですが、「ひどい!」と思う人もいるかもしれません。

皆さんは、もう高校生ではありません。立派な大学生です。「丸暗記」だけでこれからやってゆくことはできません。正解をチラリと見て丸暗記したり、そこにある「正解」を丸写しするだけで済んだ時代は終わりです。

これからも、当然、丸暗記が必要になるときはありますが、正解を探し出して発見する能力、要素的な知識を組み立てて、目的のためにより大きな概念構成物を作ったり、大きな手順を編み出したりする力を自分で育てる必要があります。その力こそ、大人の知性です。

「簡単に丸写しすればできる」ような課題は、私の授業にはありません。もちろん、丸写しは不可です(零点です)。

たとえば、・・・

(後略)

---

やれやれ、これは、戦いである。根の要る、息の長い戦いになるだろう。

---

## (12) もう一つのパンチドランカー/ゲームオタクへの心配

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12\\_e1cc.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12_e1cc.html)

2005/10/22

もう一つのパンチドランカー/ゲーム・オタクへの心配--心理、教育、社会性の発達(12)

2002年の冬季オリンピックで、聖火台に向かって点火ロケットに着火した人物は、ボクシング界の英雄モハメッド・アリ(カシアス・クレイ)だった。それはパーキンソン病と戦う痛々しくも勇気あるアリの姿だった。彼のパーキンソン病は、長年のボクシング人生で、頭部を強打され続けた結果生じた「パンチドランカー」によって引き起こされたものと推測された。

「パンチドランカー」--頭部を強打されることが繰り返された結果生まれた脳損傷をこう呼ぶのである。左右の平衡感覚を失ったり、若いうちでもしばしば軽い脳震盪を起こしたりする。年をとるとさらに重篤な症状を現して、あのアリのようになる人も少なくないそうである。

さて、今、私が問題にしたいのは、もう一つの「パンチドランカー」である。現代の青年の脳に損傷を与えていると思われるからだ。

タイピストや入力オペレータ(キーパンチャ)が女性の花形職種だった頃、「パンチドランカー」という現象がいろいろな人から取り上げられた。タイプライタやキーボードのキーを眼にも留まらぬ速度で打ち続けるオペレータは、いかにも時代の先端に立つ女神のように見えた。しかし、この職業に2-3年勤務した"ベテラン"の女性の多くは体を壊して職を辞して行った。結婚して幸せな生活に転換していった方も大いには違いないが、何人かは「頸肩腕症候群(キーパンチャ病)」と呼ばれる病いに一生悩まされることになった。一部は廃人同様になり、一部は発狂して、一部の女性は自殺した。「頸肩腕症候群(キーパンチャ病)」は一時期大きな社会問題となった。その後、連続してキーパンチする時間を制約するなどの法的な整備が進んで、発生する患者も減り、昔ほどは騒がれなくなった。

私も、職業柄、その種の痛ましい患者に遭遇する機会も多く、また職業病に詳

しい医師からお話を聞く機会も多かった。

キーパンチャ病は、まず、キータッチ・ハイから始まる。キーボードをすばやく打つためには、固定姿勢で、腕の無駄な動きを少なくして、呼吸によって重心移動が起こらないように工夫する。指の伸びる範囲は指を伸ばすだけで届くようにしたほうがすばやい。素人っぽく腕を動かしているようでは遅くなってしまう。初めは息苦しいくらいに感ずるが、キーを打ち続けているとだんだんに気持ちよくなってくる。マラソンランナーが体験する「ランナーズ・ハイ」という現象と同じ「キーパンチャーズ・ハイ」である。脳内からはアヘン様物質が大量に供給され、気持ちがよくなってくる。キーボードを間断なく、すばやく、もっと速くと打てば打つほど、気持ちがよくなる。あまり気持ちがよくて、息をしなくとも苦しくはない。そのほうが重心移動が起こりにくく、仕事が進む。そのうち、ほとんど息を止めてキーボードを打ち続けることになる。実際は本人の体内は慢性的な酸欠状態が続いていることになるのだが、気持ちがよくてその事実には自覚はない。気がつくともキータッチする指の速度が落ち、意識は朦朧としている。ヘンだなと思うと、トイレに立ったりタバコに手を伸ばすことになる。必要な酸素補給と比べれば、不足しているはずだが、スピードを競うキーパンチャに十分酸素を補給する余裕などはない。すぐに指先は、また激しくも華麗なキータッチを再開する。機関銃のような音がとどまるところを知らぬかのように鳴り響き続く。やがて、また、指の速度が落ち、意識は朦朧としてくる。オペレータさんは、一瞬だけ呼吸すると、また、キーを叩き続ける。まるで、深い海の底から貴重な魚介類を引き上げてくる海女のように、一瞬だけ呼吸するとまた深いキータッチ夢中の世界に入ってゆく。

こうして、酸欠が繰り返され、長期間酸欠に晒されると、指先を宙に浮かせるために固定している腕と、その腕を支える首と肩の筋肉細胞が生存条件の限界に達して固く収縮し一部の筋肉繊維はまだらにポロポロと死んでゆく。自覚症状としては肩こり（および首こり）がひどく、肩の筋力が著しく低下したことを感ずる。実は、この時点ですでに危ないのである。酸欠によってダメージを受けているのは、肩や首、腕の筋肉細胞だけではない。脳細胞も同様にダメージを受けているのである。この時期には、パンチ・ドラム初期の症状を示す。立ちくらみ（脳震盪）、左右の平衡感覚の低下、意欲の減退などである。これが「頸肩腕症候群」の始まりである。この症状になると、意欲が減退し、朝が辛く寝坊や遅刻・欠勤がちになる。動作が不正確になり、物忘れがひどく、集中力が働かなくなる。周囲からは「怠け病」といわれ、本人は、心がずたずたに傷つきながら、もっと集中して、もっとがんばらねばと自分に言い聞かせ焦りが募る。周囲の冷たい視線の中で、無口になり、まじめなオペレータさんほど、さらに病いは進んでゆく。

さらに、肩の筋肉が固く収縮することによって、血管が締め付けられて、頭部をめぐる血流を阻害する。脳はますます酸欠に晒される。その結果、脳細胞の小さな部分があちこちとランダムに壊死し、思考力の低下、著しい意欲の減退、記憶障害、認知障害などの症状を現す者も出てくる。激しい耳鳴りや耐え難い偏頭痛に絶望して、「いっそのこと」と自殺してしまう人も出てくるのである。激しい幻覚のために他人に攻撃的になったり、人格が破綻して日常生活ができなくなる者もいる。これはパンチ・ドランカーの進んだ状態である。「頸肩腕症候群」の末期である。医師に「精神分裂病（当時の呼び名、現在は統合失調症と呼ばれる）」を疑われて、投薬治療が行われたり、精神病院に強制入院されたりもした。

さて、システム開発の現場には、「頭の壊れた人が多い」といわれた。ウインドウ、マウス、カーソルの登場の以前は、キーパンチが作業の中心であり、キーパンチャほどではないものの、やはりパンチドランカーが発生した。ウインドウ、マウス、カーソルが登場しても、しばらくの間は、開発の現場はキータッチが中心であった。今はかなり軽減されたが、一般ユーザのパソコン操作に比べればまだキータッチに傾いている。マウスとキーボードを頻繁に行き来するのがわずらわしいと感ずる技術者も多く、この作業スタイルは完全にはなくなる。それでもずいぶんと良くなったのだ。

かつてのシステム開発の現場では、優秀な若者がいつの間にか、意欲減退と遅刻欠勤の常習者になり、キーボードは相変わらず打つものの無駄なタッチを繰り返していることが多くなって来る。パンチ・ドランカーはキータッチの禁断症状があるのである。キータッチしていないと胸が苦しく、偏頭痛がしたり、気分も重苦しい。顔も暗くて気分も晴れない。仕事が進まないことも鬱に似た症状を誘発する。無駄に激しくキータッチすれば、脳内麻薬は供給され、気分が良くなって来る。キーを打つ音は激しくとも仕事をしているのではなくて、脳内麻薬を求めているだけなので、仕事は進まない。こんなときは、キータッチ型のゲームに熱中している場合が多い。あんなまじめな青年だったはずなのに、職務中に、なぜ・・・、と管理者は啞然とし、いぶかるのである。確かに脳がすでに一部壊れているのである。本来システム技術者は、要求仕様を基に高次化したシステム概念を構成し、高度に構造化した概念記憶を維持し、その記憶を基にトップダウンに設計書を書き、今度は逆に下位概念から上位概念に向かって順次プログラムに書き上げてゆかなければならない。作業の途中で記憶が薄れたり、概念構成があいまいになったり、何よりもまず概念構成を作り上げる能力に減退が生じたりすれば、この世界の仕事はとたんに不可能になる。本人は、以前と同じに「できるつもり」でいる。気分が晴れないから、気分回

復のためにゲームなどで無駄なキーをしばらく打ってから仕事に取り掛かろうと思うのだろうか、注意すると「すぐに仕事に取り掛かります、ちょっと待ってください」と言ってゲームをやめなかったり、「いいだろうがぁ、ほっといてくれ!」などと怒鳴り散らす者まで出てくる。明らかな職務規律違反である。注意3回、警告2回、退職勧告1回を経て、事実上の懲戒解雇、というコースになる。そこまで行かなくとも、周囲と折り合いがつかなくなって自己都合で退職するものが多かった。

私がシステムハウスを立ち上げた約25年前から、しばらくの間は、このようにして退職した「経験者」が再就職先を求めて頻繁にやってきた。最初の何人かは知らずに雇ってしまった。経歴は立派で、業務履歴は申し分ない。しかし、いざ仕事となるとどこかおかしいのである。集中力に欠いており、いっぴしのことを言う割りに、目的に沿った具体的な発言がない。半年もすると、他の「正常な」青年を誘ってさぼりグループを形成するようになったりする。自分だけが仕事が進まないのは耐えられないので、年下の青年たちを"長時間タバコ"や"秘密ゲーム大会"のサボりに誘うのである。壊れてしまった者がいつの間にか身に着けた生活の知恵である。「赤信号、みんなでわたれば怖くない(?)」とばかりに、処罰をも恐れぬ行動に出てくるのである。本人にしてみれば、そうしなければ、身も心も苦しくて居ても立ってもいられない。しかも本人の障害に起因するものだと知らないので、職場環境に原因があるのだと勘違いが募る。その勘違いも含めて「みんなもそうだろう。だから誘ってやったんだ」と英雄気取りである。職場の生産性はとたんにわるくなるので、職場環境の改善に神経を尖らせている管理者はあわてて、原因を探り、環境や手行手順に問題はないかと事態の改善に努めるが、改善の兆しが無い。しばらくするとサボりグループの存在が発覚する。メンバーの大半は注意すれば改善するが、さぼりグループの事実上のリーダーは、一向に改善しない。しかも転職してきたときの立派な経歴書ゆえに、プロジェクトリーダーに任命していたりすることもあるので、始末におえないことになる。追及の仕方によっては人権侵害として訴えられることもあるだろうと管理者は躊躇し、混乱はしばらく続くことになる。数は減ったが、今も、この業界には時々聞く話である。

さて、ゲームに熱中して幼稚園・小学校・中学・高校を過ごしてきた青年たちは、どうだろうか。心配がないとはいえないのではないだろうか。今回は、職業病としてのパンチドランカーを取り上げたが、回を改めて、ゲーム少年の問題は取り上げたい。

琵琶



---

## (13) ゲーム・オタクへの心配

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12\\_b2a7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12_b2a7.html)

2005/10/31

ゲーム・オタクへの心配--心理、教育、社会性の発達 (13)

一つ前の記事で、「もう一つのパンチドランカー/ゲーム・オタクへの心配」を書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12\\_e1cc.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12_e1cc.html)

この中で、「システム開発の現場には、「頭の壊れた人が多い」といわれた」と、書いた。

パンチドランカーという職業病である。因果関係を証明しにくいので、労災認定は受けにくいだろうが、関係者ならば（あえて、口にはしないが）良く知っている職業に起因する病気である。

実は、どうやら、「システム開発の現場・・・」ばかりではなく、学校の教室にも、パンチドランカーがいるのである。パンチドランカーは、キーボードを叩いていないと寝てしまうか、不安で落ち着かない。お行儀良くしていると血行が悪く表情に乏しい。キーを叩き始めると一時的に顔に赤みがさして、表情が明るくなるが、授業に集中できない。饒舌になってお隣さんの迷惑も顧みずにしゃべり続けたりする。深い思考はできなくなっているのに、キータッチだけは速いのに、情報系の成績は必ずしも良くない。禁断症状があり、キーを叩かなければ陰鬱になったり、不快感でやたらと怒りっぽくなっている。無駄にキーを叩く傾向があり、早打ち文字入力ソフト（ゲーム仕立てのタイプ練習ソフト）を常時持参して叩き続ける者も少なくない。他人の話などは耳に入らない。指先に激しい連続した打撃を与え続けることで脳内麻薬（ $\mu$ -エンドルフィン）は、本人を陶然とさせてしまっている。教師が注意したところで、何を言われているのかほとんど理解できない。倫理感が低下しているのである。別の言い方をすれば鈍感になっているのである。本人にしてみれば「キーを叩かなければ正気でいられないんだ。分かってくれよ。止めたら教室から出て行ってやる」というくらいの意識しか生まれてこない。

学習困難は、症状のどれかに該当する者は90%に達すると書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/10\\_737c.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/10_737c.html)

そうは言っても、1つくらいに該当していても学習ができないことはない。複数の症状が重なると学習はいよいよ困難になってくる。ほうっておけば、普通の授業にはついてゆけないに違いない複合的な症状を見せる学生は、いろいろな大学を取り混ぜると、3割-4割程度いる。大学の教師らは、涙ぐましい努力で、何とか「こっちの世界」に目を開かせようと悪戦苦闘している。それでも成功と失敗は、残念ながらあい半ばしているといわざるを得ない。耳は聞こえているのに教師の言葉は理解できない、や、授業中かたときもジッとしていられず、注視しているものが次々に変動するような学生もいる。これらに混じって、パンチドランカーもまた学習困難者の一画を占めている。無駄にキーを叩いていないと目覚めていられないし、キーを打ち始めると陶然としてしまって、思考が停滞する。学習できる状態ではないのである。キータッチ中毒は3割-4割程度いる学習困難者の2割程度である。

パンチドランカーに似た言葉に「ゲーム脳」というものがあるが、この言葉を初めて使用した人は、ゲームおたくたちの脳の一部分が壊れているという現象の一部を捉えたが、原因や機作を頓珍漢に解釈している。論拠もあやふやである。むしろ「ゲーム脳」などという新語を作ってくれたおかげで、昔からあるパンチドランカーというれっきとした病気を多くの人が見逃す煙幕を作り上げたことになってしまった。「ハード・ゲーマ」が陥るのは「ゲーム脳」ではなくて、「パンチドランカー」である。

学校では病気になるほどキーを叩くような授業はない。その寸前くらいまででもやれば、大いに教育効果はあるだろうけれど、授業時間数の制約などから、その100の一ほどもキーを叩く授業はできないのが実情である。どこで、彼らはその病を得ているのだろうか。

それは、「ゲーム」である。大人たちは子供たちの社会性を育てる援助をする代わりに一人遊びを喜んでいる。親も保育士も小学校の教員も、一人遊びは歓迎である。自分たちの手がかからないからである。生身の子供が将来困ろうがお構いなしである。だって、偉い幼児教育の先生も「一人遊びは個性を伸ばす(というウソ)」を言っているじゃないですか、というわけである。子供同士の交流への意欲も技能も身に着けられなかった子供はますますひとり遊びにはまってゆく。一人遊びは没個性と没人間性を作り出すのである。没交渉を固定し、ニートを生み出しているのである。携帯用のゲーム機に魅入られたように一人遊びする入学前児童、小学生、は、大人たちの不作為の作為の結果であり、社会性の欠落ゆえに社会からの脱落が約束されてゆくことになるのである。その不幸な子供たちのさらに何割かは、重篤なパンチドランカーになってゆくのである。

誤解のないように、言うが、ニートの原因のすべてがゲームにあるのではない。

ニートの主たる原因は、社会性を発達させない、親、教師、社会の失敗にある。パンチドラッカーの発生も同根であるが、その一部の枝に過ぎない。手抜きのために一人遊びを美化した結果の一つが「ゲームおたく」の大量発生であり、結果としての電子ゲーム起因性パンチドラッカーである。

パンチドラッカーの怖いのは、精神科病院に入れるほどではないが、脳の一部がすでに物理的に壊れていることである。口頭での注意や説得、グループ活動への誘導などだけではなかなか改善が進まない。重篤な学習困難が見られる。社会生活にも相応の支障があるに違いない。単なる社会性の発達不全ではない。この種の子供たちに対しては麻薬中毒やタバコ中毒に対処するいろいろな手法が役立つ可能性があるものの通常の教育の範囲を超えている。心理学の特定分野であるいわゆる「行動療法」が役立つかも知れない。

しかし、すぐに精神科の医師にゆだねるのは躊躇される。この種の学生は寝坊、陰鬱などの症状を強めるので、親も心配する。キーを叩いていないと鬱状態に近い外見となるのであるから精神科に子供をつれてゆこうとする親も多い。この種の学生を精神科に連れて行って相談したら、すぐに入院投薬となったケースがあった。2か月後、退院してきた本人に会って仰天した。想像を絶する彼がそこにはいた。鬱様の症状は消えたが、人格は破壊され、騒々しく誇大妄想的な話題をところ構わず息せき切って語りかけ同意を求め続けるパラノイアの症状を激しく見せていた。正常な判断力はもはやなかった。ハード・ゲームの生活も続けていた。本人の話し相手になりながら、この子をこんなにまで破壊した責任は誰にあるのか、と激しい怒りが内心をおおった。半年後にも面会したが、この症状は変わっていなかった。精神科の医師は、鬱と診断して、抗鬱のための投薬治療をしたのに違いない。医師にも言い分はあるだろう。「鬱は直した」という自信と誇りもあるだろう。しかし、残っていた大半の判断力を崩壊させ、人格を破壊し、パラノイア（妄想性障害）にした責任は医師にもないのだろうか。これは例外的なケアケースなのだろうか。精神科に入院していた短い期間に医師起因性ではない別の発症が見られたのか。遺伝性疾患（ある種の言語障害がある）の子供たちの治療と研究に取り組む親しい医師が、雑談の中で、「精神科の医師は××××を作りますから、子供たちを預けるわけには行きません」と私に真剣なまなざしで語ったことが思い出される。この医師にも、よほど腹に据えかねることがあったのだろう。

ところで、誤解を避けるためにあえて付記するが、社会性の発達阻害を受けた若者がすべてパンチドラッカーと言うわけではないということである。マスコミなどではすべてが「ゲーム脳」で片付けられてしまうときもあるが、これは事実と反している。社会性の発達不全と見られる学生は3-4割、教師が奮闘努

力して10数パーセントに押しとどめられる範囲である。きわめて多人数なのだ。このうち、社会に出て、現実の仕事と仕事仲間にもまれているうちに改善される若者も多い。ミスマッチ退職-再就職困難となって、ニートとなる者は若者全体の2%程度だろう。統計は採っていないが、実感としては、社会性発達不全学生/全学生=3-4割 のうちの30人に一人程度がおそらくゲーム起因性のパンチドランカーである。グレーゾーンにいるボーダー君を合わせればその3倍程度だろう。ボーダー君らを入れると100人位のクラスならば7-8人いる勘定である。無駄にキーを叩いていないと意識が維持できない程度に重篤な者は数%で、100人くらいの教室では2-3名である。ひどい状態だが、現実である。この種の学生は深い思考が出来ないので、私の授業の単位はかろうじて取れても他の厳しい先生の授業の単位を取得することは難しい。2年生になると大半が自主退学してしまうため、ぐっと少なくなっている。退学後は、たぶん引きこもりか良くてフリータなのだろうと推測される。驚くことに大学を退学した者をフォローしている公的機関や人はいないので、だれもその実態を正確には知らないのである。

一方、パンチドランカーではないが社会性の発達不全に陥っている若者は、もっと多いのである。彼らは、何とか、「お情け」で大学を卒業してゆき、「異星人」「新人類」などとちょっとおどけて言われて社会の迷惑となりながら、多くは本人も苦しみながら自分の社会性を改善する。残りは、社会の迷惑になったまま、自分では改善の方法も思いつかず、挫折と自己嫌悪を抱いて若くして社会からリタイアする。いわゆる「ミスマッチ退職」にならざるを得ないのである。ニートの大量発生は、社会環境と教育に「社会性の発達阻害」の原因がある。ゲーム起因性のパンチドランカーはその重篤な一部の現れ表れに過ぎない。

ゲームオタクのみなさん、あなたはパンチドランカーにかかっていますか。キーを叩いていないと明るい心が持続できないと感じたら、かなり危ない状況です。

学生相談室（または学習支援室、大学によって呼び名が異なる）のドアをノックしてください。そこで、「たぶん、ゲーム起因性のパンチドランカーです」と告げて見てください。現代の青年の生態と心理を熟知している担当者が、よく話を聞いてくれるはずです。

琵琶

## (14) やはりあった「教師の本音」

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/11/14\\_3414\\_1.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/11/14_3414_1.html)

2005/11/06

やはりあった「教師の本音」--心理、教育、社会性の発達(14)

私は、2005/09/23、このブログに「急増する小学生の教師への暴力--心理、教育、社会性の発達(9)」という記事を書いた。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/9\\_c332.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/9_c332.html)

-----  
(前略)

教員たちには気の毒だが、「いじめ」「学級崩壊」「校内暴力」などは、社会性の発達を阻害する教師起因性であるとも書いた。教室が安定せず、不安定が生ずれば、教師は防衛上、子供たちに斉一性の圧力を大きくしてゆく。子供たちは本能的に(ウソでも)自分を受け入れてくれそうな仲間を探して、教師の届かないイジメグループに接近してすぐにその餌食になってしまうのである(「金もってこい。そうしたら仲間にしてやる」「俺たちは仲間だろう。仲間が大事だったら、万引きしてこいよ」・・・)。「仲間にしてやる」というエサは、成長期の子供たちや青年たちには抗いがたいものである。バカなことと言わなけれ。かく言うあなたも、どこかに似た記憶があるのではないだろうか。イジメるな、イジメグループに接近するな、余計なことをするな、と斉一性の圧力が強まれば強まるほど子供たちの言い知れぬ反抗心が湧き上がってくる。理屈では説明のできない反発である。子供たちは自分の個性を認めて受け入れてくれる場を求めているのだ。個性を殺すことを求められ、かつまた優劣の比較(「かけっこはボクのほうが速いよ」「歌は私のほうが上手でしょ」・・・)を禁じられた子供たちに理論で反論するだけの力はない。教師の教育理論の前に屈服するしかないだろう。しかし、それでも承服しがたいものは承服しがたいのだ。「ボクたちの話を聞いてくれない」「教え方がヘタ」「何を言ってんだかわかんない」というとてつもない言葉が子供たちの口から吐き出される。教師はただただ逆上してしまうのである。自分が愛してやまない子供たちから、教師に向けられた侮蔑の言葉だ。「私の気持ちがなぜ分からないの」というわけである。教師以外の人たちにその苦痛と苦悩を分かってもらえるだろうか。教師たちの絶望感は深い。教室の秩序を維持するためには、子供たちに対する斉一性の圧力をますます強めることになる。強圧によって、子供たちを押さえ込むことに成功する"有能な"教師は多いが、押さえつければ何かのきっかけで爆発する。学級崩壊

である。いま教師は学級崩壊と戦っている。学級崩壊を避けるためには、子供たちの自由な結合を禁止して、人間関係を築かせないようにアンテナをカメレオンの目のようにめぐらせながら、子供たちの共謀を防止しようと躍起である。しかし、武力で制圧された民族がテロとゲリラで抵抗するように、子供たちは仲間を募って教室をひっくり返してしまうことをあきらめるかわりに、突然教師に殴りかかったり、机や椅子を投げつけたりするようになるのである。教師に向かって刃物を振り上げる子供までいる。「校内暴力、とくに教師に対する暴力」が増大しても事の成り行きの通りで当然なのではないのだろうか。

(後略)

長く引用したが、つまり、ここでは、教師たちは、学級崩壊を避けるためには、子供たちの自由な結合を禁止して、人間関係を築かせないようにアンテナをカメレオンの目のようにめぐらせながら、子供たちの共謀を防止しようと躍起であること、しかし、武力で制圧された民族がテロとゲリラで抵抗するように、子供たちは仲間を募って教室をひっくり返してしまうことをあきらめるかわりに、突然教師に殴りかかったり、机や椅子を投げつけたりするようになること、を私はのべたのである。

子供たちの自由な結合を禁止することを正当化するために、ある種の教師たちは「イジメをなくすために他の子供とは関わらせない」という理論を作り上げている。これは、どうしてよいか分からない現場の教師が子供たちを抑圧し、万力で押さえつけるように、子供たちの社会性を発達させまいとがんばるための"素敵な"理由なのである。この正当化理由(心理学風に言えば「合理化」)は、イジメと学級崩壊の特効薬として、全国を駆け巡っているかのようだ。誰も助けてくれない孤独な現場の教師たちは、すぎるものといえば、子供に対する教師と言う特権的優越性だけなのである。普通ならば、子供も親も、教師の「指導」の前には身と心を投げ出す以外にないからだ。

何の権利があって、こんなことを書くのかと、お叱りの声が聞こえてきそうだ。学生たちのうつむき加減に語る、思い出話や、疲れた心をさらけ出したときの言葉の数々は、小・中・高の時代の忌まわしい出来事、楽しくない教室の思い出がぎっしりと詰まっている。大学の教師である私の目の前に、彼らの心の底にしまわれた忌まわしい出来事が透けて見えてくるのである。名門校の出身者であれ、そうでない者であれ、それは同じである。首都圏や大阪周辺出身者にこの悲しみを口にする学生は多く、地方からやってきた子に少ないという傾向はある。しかし、全国的な傾向であることは否めない。

大学の教師も、教師である。子供たち(大学生)の悲しみを理解できずに大学の教師などは務まらない。大学の教師にも、教師としての発言を認めていただ

きたいものである。

こんなことを感じているのは、一人私だけなのだろうか。

たまたま、ここ数日の内に読んだ本のあとがきに次のような記載があった。この作者も、私と同じ意見のように感じられる。しかも、この著者は子供たちに直に接しているカウンセラーの一人である。私などよりも事実をたくさん掌握しているに違いない。

青木和雄、「ハートボイス--いつか翔べる日」、フォア文庫、金の星社（2004）

-----  
作者あとがき---青木和雄

・・・。

子どもと向き合ってカウンセリングをしていると、子供たちの「ハートボイス」が聞こえてきます。言葉にならない悲しみが、子供たちの心からあふれだしてきます。いじめ・不登校などの現象のおくには、規則と管理のあみをかぶせて、子どもの心をふうじこめようととする、おとなたちの顔も見えてきます。

ある中学を訪問したとき、「うちの学校にはいじめはありません。生徒たちには、自分の進学のことだけ考えるように指導しています。友だちと関わらないようにすればいじめも起きませんから」といった教師がいました。わたしが、子どもたちの「ハートボイス」を、本に書こうと思ったきっかけにもなる、重いことばでした。

・・・。

-----  
やはり、そうだったのか。そうに違いない、心重く、私は納得した。小中高の教師たちは汲々として「子どもたちが、友だちと関わらないように」あらん限りの力を尽くしているのである。十分な社会性の発達の余地などありえないのである。むしろ教師たちはそれとは知らずに社会性を発達させまいという涙ぐましい努力をしているのである。

小中高の先生たちをお願いします。子どもたちが健全な子どもたち同士の交流と仲間作りをする拙い努力を側面から助けてあげてください。「友だちと関わらないように」ではなくて、「友だちと関わる」ように指導してください。いじめグループや万引きグループに近づかないように気を配りながら、その反対にいる健全な子どもたちのグループを育ててください。いい子のグループと悪い子のグループをはっきり区別してあげることは、大人の責任です。子どもたちは、まだ分別が十分ではありません。幼子や少年少女は、悪い子のグループでさえ仲間ほしさに容易に接近したちまち悪に染め上げられてしまいます。区別を教えることは決して悪いことではありません。親や近所の大人たちにもお願いし

ます。よい子の仲間たちを大人たちが暖かく育ててください。ほんとうに、本当にお願ひします。

琵琶

---

## (15) 多すぎる、社会性の発達阻害の原因

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/11/15\\_b7b8.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/11/15_b7b8.html)

2005/11/20

多すぎる、社会性の発達阻害の原因--心理、教育、社会性の発達(15)

以前に書いた記事で、2005/10/15 某大学で「情報教育担当者懇談会」が開催され、私が発表する予定であると書いた。

「気がつけば全般的学習困難と学習障害--心理、教育、社会性の発達(10)」

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/10\\_737c.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/10_737c.html)

実際に行われた当日の発表に使用したパワーポイントのスライドから、今回はひとつだけ引用する。

---

### 3-1. 認知の構造化の阻害

#### A 社会性の獲得の段階(発達阻害の段階)

0-3 歳ころ、家族の存在を知る、はず。(家族の崩壊)

3-7 歳ころ、他の家族の存在や複数の友達グループを知る、はず。(一人遊びから仲間遊びへの誘導の欠如、一人遊びは個性を育てるという誤解)

7-10 歳ころ、グループ間の関係や家族間の関係などのネットワークと、仲間-クラスや家族-地域社会などのメタ組織を知る、はず。(アイデンティティへの抑圧)

10 歳ころ、異性を意識して社会に眼が開く、はず。(社会の仕組みを教えずにセックスを教える学校現場)

10 歳以上、組織間の関係の高度な構造を理解する、はず。(団体活動への非参加、知性なき丸暗記の強制)



## B 社会性の高度化の段階

10歳程度を境にして、青年は、認知の構造化に目覚める、はず。（団体活動は少なく、知性なき丸暗記の強制は続く）

---

子供から青年へ、社会性の獲得と発達、主としてこの間に行われる。私は、この時期を2つに区切った。

### A 社会性の獲得の段階（0歳-10歳くらい）

### B 社会性の高度化の段階（10歳くらいから後）

日本の社会では、すべての段階で、子供たちを取り巻く環境に「社会性の発達」を阻害する社会的要因がある。

### A 社会性の獲得の段階（0歳-10歳くらい）

#### （1）0-3歳ころ

家族の存在を知る、はず。しかし、家族が崩壊していることも少なくない。そうでなくとも、両親ともに忙しくて、保育所や保育園に預けられているなど、子供にとって必要な家族の接触が制約されていることも多い。

#### （2）3-7歳ころ

自分の家族以外の他の家族の存在や複数の友達グループを知る、はず。しかし、今は、明らかに大人たちによる一人遊びから仲間遊びへの誘導が欠如している。公園で遊ぶ子供たちが少ないとの指摘は多くされているが、いたとしても、親と遊ぶばかりで、「ボクたち、おじょうちゃんたち、この子も仲間に入れて遊んでくださいね」という親が少ないことに驚かされる。「一人遊びは個性を育てる」という厚顔な「誤解」を「学問」のように吹聴する書籍や保育園も多い。このトンでも育児学は、保育者が手抜きをするための隠れ蓑にしか過ぎない。一人遊びは社会性の欠如した孤立的性格（引きこもりスペクトラム）を育てるだけである。

#### （3）7-10歳ころ

グループ間の関係や家族間の関係などのネットワークと、仲間-クラスや家族-地域社会などのメタ組織を知る、はず。しかし、教師を中心にパーソナリティへの抑圧と仲間との交流の禁止が続くので、メタ組織の存在を体験することが少なく、個性を周囲に認知させることによって確立するはずのアイデンティティが確立しない。この時期の悪影響が極めて大きい。

#### （4）10歳ころ

異性を意識して社会に眼が開く、はず。しかし、社会の仕組み（=世間の仕組み）を教える教師も親もは少ない。性への目覚めは社会の仕組み（=世間の仕組み）

を教える絶好の機会である。この機会に教えなくて、いつ教えられるだろうか。しかし、この時期に「社会」を教えずに、性教育と称してセックスのやり方を教えるおろかな学校現場もあるのである。これを「先進事例」として報道する間抜けなマスコミもある。

#### (5) 10歳以上

組織間の関係の高度な構造を理解する、はず。しかし、「お受験のためにクラブ活動はやめて」などと団体活動からの引き剥がしはいっそう進んでゆく。高度化する認知能力を深化させるのではなく、知性なき丸暗記、考え無しの丸写しを強制する「受験勉強」を強いるのである。

#### B 社会性の高度化の段階

(6) 10歳程度を境にして、青年は、認知の構造化に目覚める、はず。しかし、知性なき丸暗記、考え無しの丸写しの強制は続く。大学に入学する直前まで、このことは続くのである。学生は、「答えを教えてくれなくてはレポートがかけない」などとのたまうことになる。認知を高度化し構造化するなどということは教えられるどころか正しいことと知らされることもなかったのだから、当然であろう。大学の教員は学生の発言に仰天するが、判定を「不可」とするかお情けで「可」にするかを悩むのがせいぜいで、かれらの認知の構造化を手助けするような義務を負っているとは、(残念ながら)感じていない。

社会に出てから、厳しい生存競争にさらされる企業や研究所が「使い物にならない」とその青年男女を切って捨てるまで、「社会性の発達阻害」は顕在化することさえ少ない。「アンマッチ退職」とは職種がアンマッチだったのではない。本人が社会というものとアンマッチだったのである。現に職種を変えてみたところで「再就職困難」となって、フリータかニートを余儀なくされる青年が多いのである。

不思議なことだが、「社会性の発達」は「発達心理学」の専売特許のようになっている。誤解してはならないが「発達心理学」は「社会性の発達」の全般を扱うことはないのである。主として幼児教育の場面に限定されているということである。子供から青年になる前の心理的発達を扱っているのである。「社会性の発達」とは、幼児が自分以外の他人を発見する過程だけなのだろうか。この過程も大切な一要素だが、この発達だけで社会生活ができるようになるわけではない。私が、取り上げている社会性の獲得と発達の全体を捉えるという意味ではきわめて限定的なものである。これを幼児期よりもさらに年長な子供たちの心理にまで拡張してゆこうという意欲的な「発達心理学」の先生方については、過去にもいくつか取り上げた。しかし、これらの人々は、失礼ながら心理学の門外漢=心理学素人である私が見る限り、例外的な(異端の)研究者たちなので

ある。

「教育心理学」には「社会性の発達」がほとんど登場しないというところでもない事実については、すでに述べた。

「教育心理学」の限界と希望--心理、教育、社会性の発達(2)」

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2\\_4ce5.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/2_4ce5.html)

「超える努力--心理、教育、社会性の発達(8)」

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/8\\_7e26.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/09/8_7e26.html)

「青年心理学」は、第二性徴期以降の心の中に生起する心理現象を扱っているだけであり、「社会性の発達」という成長の動的な過程を扱っていない。

「社会心理学」は、すでに人々の中で固定してしまっている「社会性」が、現在の社会の中でどのように発現しているかを解明しているが、「社会性の発達」を扱ってはいない。

「社会性の未発達」は、心理学の世界では、「精神障害」と位置づけられているに過ぎない。日本には、70万人とも100万人とも言われるニートがいる。その数は日々増加している。彼らのすべてが「精神障害者」なのだろうか。薬漬けにする以外の方法で彼らを救う方法はないのか。否、それ以前に、彼らが「精神障害者」であるならば、これほどの多数の「精神障害者」を生み出してしまう社会的教育システムになんらの問題もないというのだろうか。これほど多数の「精神障害者」が本人の遺伝的特性、または家族性に起因するとすれば、世界史的大発見である。日本人は精神障害者民族ということになるだろう。「社会性の未発達」は「精神障害」ではなく、正しくは、心理的未発達状態であると考えるべきである。

「社会性の発達」を扱う学問の分野を新たに起こす必要があるのかも知れない。

小中高の教員の皆さんは、自分たちだけではどうにもならないほどの重荷が覆いかぶさっていると感じていらっしゃるだろう。自分の子供たち(児童生徒)に対して「他の子たちに関心を持つな」と言う心理状態もよくわかる。しかし、それは、子供たち(児童生徒)の中に将来の生活不能者を増やしている行為であることをよく理解していただきたい。「そうはいったって、それしかないじゃないか」という絶叫したい気持ちも同じように痛いほどよくわかる。共働きの経済構造の改革、教員自身のための再教育制度、子供のメンタル支援制度、それより教員のためのカウンセラー、、、たくさんの「必要」が思い浮かびます。教師の皆さん、自分たちで声を上げて、改善に取り組んで見ませんか。

さて、大学の教員の皆さん、私たちも、学生らの社会性の未発達を嘆くだけでなく、新入生に対するキャンパスメイト制(ボランティアの先輩を一人以

上メイトに加えるなどの工夫が必要)の導入、グループ学習・グループ研究の推進、学会発表の経験などを通して学生らの社会性の獲得発展を促しながら、認知の構造化を手助けすることが必要なのではないのでしょうか。権威も地位もない私の微力だけではどうにもなりません、皆さんと力をあわせれば、少しは、前途ある青年男女の未来に今以上には力をつけてあげられるのではないかと愚慮しています。教育学部を中心に教職課程のカリキュラムの改善も不可欠なように感じています。

「社会性の発達」と「認知の構造化」はともに関連しつつ発展する相互関係なのであります。

「「記憶」の社会性--心理、教育、社会性の発達(3)」

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3\\_e921.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/08/3_e921.html)

たくさんのご意見をいただければ幸いです。

琵琶

---

## (16)「脳内汚染」を読んで

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/01/16\\_9ed5.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/01/16_9ed5.html)

2006/1/17

「脳内汚染」を読んで--心理、教育、社会性の発達(16)

私は、少し前の記事「ゲーム・オタクへの心配--心理、教育、社会性の発達(13)」([http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12\\_b2a7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12_b2a7.html))で、ゲーム起因性のパンチドラッカーのことを警告した。10月31日のことだった。

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12\\_b2a7.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/10/12_b2a7.html)

それからしばらくした12月15日に、下記の書籍が刊行された。

岡田尊司、「脳内汚染」、文芸春秋(2005)

岡田氏は、1960年生まれというからかなりお若い。奥付の略歴によれば東大哲学科を中退して、京都大学で医学を学び医学博士号を取得し、精神科医となったという異色の経歴とのこと。現在は京都の医療少年院に勤務されているという。

目次を見るといかにもジャーナリスティックなタイトルが並ぶ。タイトルは、

文春の編集者（とりライターたちの）の作品に違いないと思う。このタイトルでは正しくその内容を伝えるとは思えないが、列記してみる。

-----  
今、すべての人を襲う危機  
頻発するゲーム型犯罪と損なわれる現実感  
書き換えられる禁止プログラム  
高まる攻撃性と暴力への礼賛  
メディアが心のスキーマを変える  
子供部屋に侵入した麻薬  
十代で燃え尽きる脳と無気力な若者たち  
中毒になりやすいタイプと危険因子  
発達障害の子を直撃する影響  
損なわれる心の発達と押さなくなる現代人  
サイコパス化する若者の脳  
模倣する脳と巻かれた灰汁の種  
脳に仕掛けられた時限爆弾  
脳の中で起こる公害  
脳内汚染は回復できるのか  
子供たちの笑顔を取り戻すために  
-----

重要な指摘は、ゲームなどの映像メディアによる前頭葉機能の低下が起こっているということである。精神科医らしく、さまざまな事例を組み合わせでの説明で、説得力がある。前頭葉の各部位を交通事故などで物理的に損傷した人の症例を取り上げているが、まさしく問題ゲーム少年たちの行動とそっくりである。

ゲームが麻薬的で、中毒症状を引き起こすという指摘もあり、私が指摘しているところとも重なるようだ。我が意を得たりという部分でもある。

「イギリスの研究者らは、PET(陽電子放射断層撮影)という測定方法を用いて、ビデオゲームをプレイしたとき、脳内(線状体)のドーパミン放出を調べ、それが顕著に増加することを報告した。ドーパミン・レベルの上昇は快感を引き起こし、それによってその行動を強化する。つまり、その行動をもっとしたいと思うようになるのだ。その結果、依存形式にも関与することが知られている。たとえば、コカインや覚醒剤の投与はドーパミン・レベルの上昇を引き起こすのである。この実験が示していることは、そうした麻薬の投与を行わなくとも、麻薬を投与したときと同じ現象が、脳に起きたということなのである。・・・毎日長時間にわたってゲームをすることは、麻薬や覚醒剤などへの依

存、ギャンブル依存と変わらない依存を生むのである」(pp.86-87)

この記述は、M.J.Koepp et al., "Evidence for striatal dopamine release during a video game," Nature, 393(6682), May 1998.などに依拠しているらしい。

人間の進化史の中で予想もしなかった刺激に脳がさらされているという警告が岡田氏の主張の中心である。脳には刺激的過ぎる情報に対する免疫力はないという指摘と、したがってこの刺激(脳内の公害)に対するワクチンもないのだという指摘がなされている。なるほどそうなのかと私は感じた。

発達障害は原因ではないという主張も私の意見とほぼ同じである。発達障害とは多く家族性もしくは遺伝子起因性と考えられてきた概念なので、私は発達障害という言葉を選んでいる。発達障害とはいえないが社会性の発達障害は結果であって原因ではないと思う。岡田氏はテレビゲームが主因であるとしているが、私は原因はたくさんあり、中でもテレビゲームは劇症となる原因のひとつであると認識しているという程度の違いはあるようだ([http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/11/15\\_b7b8.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/11/15_b7b8.html))。とはいえ、ひとまず、私は素人であり、岡田氏は専門家である。岡田氏の説に心を傾けてみたい。

一度、汚染された脳の回復は大変困難だが、「手作り体験」が心を育てる、というくだりには救いを感じる。すでに多くの現場では、「手作り体験」を実行して、この子達の回復のための悪戦苦闘をしているからである。

大学でも、実習の教科を扱うこともある私などには、これも我が意を得たところだった。成田山近くの芝山でノート塾に取り組む塾の先生たちもそうである。([http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/08/4\\_7ce2.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei log/2005/08/4_7ce2.html))これらは五里霧中の中で行われていて、教師は自分に間違いがないかどうかを日々問いかけながらの悪戦苦闘になっている。この日々の活動に論理的裏づけを与える良い本であると思う。

「ゲーム脳」の書籍のようにもてはやされてはいないが、私としては多くの人に勧めたい本の一冊である。

ちなみに、「ゲーム脳」は、問題のありかをその間近かまで明らかにしたという功績があったものの、多くの人が指摘するように学問的裏づけに乏しく、説得力も発展性も乏しかったが、今回の岡田氏の書物はまったく異なる地平に立っていると思う。引用されている研究論文のうち、岡田氏ご自身が筆頭オーサとなっているものが少ないことには少し違和感があるが、よい解説書であると思う。この分野の言論をめぐる困難な状況を示しているものだろう。

異論のある方もいらっしゃるだろうから、反論も聞いたり読んだりしてみたいと思う。

---

## (17) モチベーションを育てる、涙ぐむ

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/02/17\\_94f6.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/02/17_94f6.html)

2006/2/11

モチベーションを育てる、涙ぐむ--心理、教育、社会性の発達 (17)

先月の「[次世代大学教育研究会](#)」(1/26)に私は「[一人にしない教育者と、一人にしない教育を](#)」を発表した。このことは、私のブログのシリーズ「[感性的研究生生活](#)」の一つにも書いた。

この研究会で発言した内容の一つでもあるが、「社会性を育てる」ためには、学生たちに「社会性の獲得に向かうモチベーションを育てる」ことが不可欠である。実は、私がこのことを真に理解したのは、昨年の初夏のことであり、その前の4-5年間は、悪戦苦闘の連続だった。

地方出身者の多い、H大学やK大学では、グループ活動、参加型授業が比較的簡単に導入できた。ほとんど最初の年から成功したとあってよいだろう。しかし、首都圏都市部(都内か川崎横浜)の出身者が多数を占めるM大学ではそう簡単ではなかった。最初の1-2年は、他の大学での成功もあり、学生らの反応が少ないのは、都市部の学生の特徴だから、それが普通だろうと高をくくっていた。しかし、明らかに学生たちはあくまでも受身で授業を受けているだけで、教育効果は上がっていなかった。グループでの活動を促しても、ダメであった。他の大学では、教師(私)の音頭で、学生たちは、そろそろと席を立ち、グループのメンバーが顔を寄せて、秘策をいろいろと練るところで、M大学の学生らは、席を立つものも少なく、グループ内で相談する姿もほとんど見られない。学生のアンケートをとると、「グループで相談しろというのは、無駄な時間」「ウザッタイ干渉」などと書く学生もいた。他大学の学生とは明らかに違っていた。その後、私はグループの課題を与えると学生たちの席の間に立ち、彼らの活動の手順やひそひそ話や学生同士のメールを画面上から読み取ることなどにいっそう努力した。機会を見ては、声をかけ、他のグループメンバーへの助力を促したり、分担や相談をアドバイスした。M大学の学生たちは、多くの場合、これを無視するか、学生同士一瞬見合わせてそのままにすることが多かった。内

心「教師の指示を無視するのか」と怒りもこみ上げてくるが、一方何か理由があるのだろうとその理由が知りたかった。私の指示に「ハイ」と言ったまま、凍り付いてしまう学生もいた。

昨年、M大学の最初の1-2回目の授業で、授業終了後、教壇に出席票を置いてかえる学生を何人か呼び止めて、いろいろと雑談をした。教壇に出席票を置いてかえるようにするのは、以前からのことで、学生たちと一瞬でも目をかわすことができるようにという理由である。雑談の中で、やっと次のような学生たちの心の内がわかった。「学生同士で相談するということは、他の学生から教えてもらうということになるので、できませんよ。そんなズルイことですから・・・」「他の学生に教えてやるなんて、そんなことをしたら自分がソンしちゃうじゃないですか」というのである。グループで学習活動することには、当然教えたり教えられたりすることが含まれる。それを「ソンしてしまう」「ずるいことはできない」と感じてしまうというのである。子供たちはなんというさびしい学校生活を送ってきたのだろうか、背筋が寒くなった。

そうか、この子達は、互いに助け合うことを激しく禁止され、競争させられてきたのだ。隣の席の子よりも1点でも多く取るためには自分が理解したことを教えたりしてはソンしてしまう、、、隣の子に聞くのはズルイことだから教えてほしいなんて口が裂けてもいえない、、、と、この学生たちは頑なに信じているのである。不真面目でグループ活動ができないのではない。まじめだからできないのだ。グループ活動や参加型学習活動の「やり方」をいくら教えても、この学生らは「できない」のだ。グループ活動や参加型学習活動のスキルが問題なのではない。モチベーションが欠けているのである。というよりもモチベーションに嚴重なフタがされているのである。

ならば、幼稚園児にやるように、お手てをつないでお遊戯からはじめなければならぬのか。ジャンケンごっこもオシクラマンジュウも経験していないに違いない。果たして？しかし、このヒゲも生えた男子学生やお化粧も上手になりかけている女子学生に「お手てをつないで、、」はないだろう。いや、実は必要かも知れないのだが、それは別に取り上げることにする。いやいや、情報の授業で「お手てをつないで」とやったら、間違った風説が心配だ。

考えあぐねて、[「情報組織論」の講義](#)を実施することにした。これは、折りしも、[2005/4/23のSH情報文化研究会で発表した内容](#)と重なった。この話をM大学の授業向きに発展させた講義を行った。学生たちは思わぬ反応を見せた。いつもはいくらかざわついて、上半身がせわしなく動く学生も多いのに、このテーマの講義を始めて5分もすると教室は静まり返って、誰もじっとしている。誰一人身動きしない。前の方に座っていた学生が、一人上を向いて涙をこらえているのが分かる。すると、また一人、うつむいてハンカチで目をぬぐう学生



がいる。なぜ、、、。私は、悲恋物語を語ったわけでもなければ、レ・ミゼラブルを話したわけでもない。社会と組織と人間の関係を語り、その中で、「情報」が、人類史的にどんな意味を持っているのかを語っただけである。社会学の範疇ではあるが、あまりにもベーシック&シンプルなので社会学の先生も授業では語らない内容かもしれない。ある経済学者が語ったと伝えられる言葉、「ひとりは、1つ以上仲間のために役に立つ。仲間は互いに助け合う。そのグループは社会に貢献する」を紹介したりしただけのことである。

学生たちは、その授業の感想として、「大学を出たら、金だけの人生かと思ってつらかったが、そうではないことが分かった」「社会に出たら他人と競争するだけと思っていたので、他人とかかわりのない生活を望んでいたけれど、別の考えが浮かんだ」「社会に出たらさびしい生活だと思っていたのに、先生の話でそれは違うとおもったら、涙が出てきてしまった」と書いてきた。彼らは、こんな話を親からも小中高の先生たちからも聞いていなかったのだ。「だから、先生はグループ活動など社会に出ても困らないように進めてくれていたんだと分かった」とあったのには、手を打って私も喜んだ。教えられるべきことが教えられていない学生たちに、遅ればせながら教えられることは教えてあげるとするのは年長者の務めではあるだろう。普通は、自然な成長の過程で身に着けるはずだった「社会性へのモチベーション」に、学生たちは、大学にまで来て、私の授業で初めて遭遇したのである。しかも、大学生は大学生である。礼儀作法は知らない（「だって教えられていないッモン」）が、知的水準もかなり高いのは当たり前である。「社会性へのモチベーション」も「お手てつないで、お遊戯」ではなくて、知性に語りかけることによってかなりの成功を収めるということが分かったのである。これは、私にとっても感動的で衝撃的な体験となった。M大学のグループ活動がその後は順調に進展したのはいうまでもない。実技も半分は含まれている私の授業ではグループ活動が成功するかしないかでは、教育効果が大きく異なる。実業の世界でも、作業を体得するのはグループ活動の中のほうが極めて大きい。昔、農作業や浜仕事、道普請などは誰でも参加して上達した。ビデオ教材もCALもなかった時代のことである。周囲の人たちのやりようを見て覚えた。仲間のやりがちな小さな失敗は笑いながらも教訓にした。グループ活動の教育効果は何者にも変えがたい。

H大学やK大学でも同じ「情報組織論」の講義をやってみた。不要かと思われた田舎からやってきた学生たちにも、この講義は沁みたらしい。教室での活動は一気にブレイクした感じがある。

2005年度は、「グループ活動」を教える前に、グループ活動のモチベーション、すなわち社会性獲得のためのモチベーション＝「情報組織論」を教えるのが正解であると確信した1年であった。今年は、どの大学のどのコースでも第1時限

目にこの講義を試みようと思う。新入直後の学生に、こんな話を受け入れるだけの落ち着きとゆとりがあるかどうか少し心配だが、、、。

振り返って、幼、小、中、高の教育においても、「社会に参加することのモチベーションを育てる」教育をしながら「社会参加」を教えていただくのが良いのではないのかと思います。私は、その方面については門外漢です。現役の教師の皆様、すなわち専門家の皆様からは、空理空論といわれるかも知れません。もっと「競争」を教えるべきなのだ、「協調学習」は無用だとお叱りもあるかも知れません。皆様、私は、大学の教壇に立つ情報教育専門のしがない非常勤の分際で申し上げることに過ぎませんが、どうか、子供を孤立させ、さびしい、惨めな人生に引きずり込まないでください。仲間と喜びも悲しみも、歓喜も落胆も分かち合い、ともにできる心豊かな子供たちを育ててください。いじめや学級崩壊を心配して幼児、児童、生徒たちが結束することを嫌う向きもあることは承知しています。しかし、悪い仲間にはいることを防止して、良い子のグループを育てることが、いじめや学級崩壊を防ぎます。昔は近所のおばチャンが優しく厳しく「いじめっ子と一緒に遊んじゃダメ。いい子同士仲良くしなさい」と言ってくれたものです。それは差別発言ではありません。「いい子同士も仲良くしてはいけない」などとおばチャンたちは言いませんでした。いい子はいい子の仲間を紹介して「この子をお仲間にしてくださいね」と母親もおばチャンたちも言ったものです。同じ力が、社会性を育む教師の指導力としてますます必要になっていると思うのです。おばチャンたちも母親らしい母親もめっきりいなくなってしまうのですから、頼りになるのは教師の皆さんだけです。子供たちのことを信じてあげてください。そして、社会の健全な仕組みや人との交流の意義を解き明かして、社会性の発達を促してください。大学の教師の個人的努力だけでは、もはや支えきれなくなっています。

場合によっては、「社会性を育てる」件においては、幼、小、中、高、大の保母・教師・教員が横断的な連絡をしよう必要があるのかも知れません。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

---

## (18) 学習の社会性について

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/04/18\\_3db6.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/04/18_3db6.html)

2006/4/16

学習の社会性について--心理、教育、社会性の発達（18）

以前、「記憶の社会性」に関する記事を書いた。これは、多くの賛同を得ることができた。社会性の発達阻害の現状についても書いて、多くの方から同感するという感想をいただいた。

私の一貫した問題意識は、近年 10-20 年ほどに限って日本で大量に発生している「ニート」と「知性なき丸暗記学生」という双子の現象の原因解明と予防法である。

教育学部の先生方のお叱りを覚悟で、教師を育てる大学教育にも原因の一端はあるということも取り上げた(1,2)。「教育心理学」の多くが「社会性の発達」を扱っていないという事実を指摘したのである。教員になるためには必須の「教育心理学」で、子供には「社会性の発達」という大切な成長があることがネグレクトされているという、事実であった。もちろん、すべての教育学の教師がこのことに気が付かなかったわけではない。希望の持てる優れた教育に取り組む先生方も少なくはない。しかし、いずれにしても少数派であることを述べた。その後、これを改善しようとする動きも文部科学省などの一部では生まれているようだが、教職教育の現場に浸透するには至っていない。と思う。

さて、学習過程において社会性はどんなかわりを持つのか、について、先行する研究がなされている。これらの成果を知ると、私が「記憶の社会性」で問題として取り上げたことからの、もう一つの説明が読み取れる。社会性をもつ知識が獲得されるプロセスが解明されている。

#### (1) 正統的周辺参加

Jean Lave & Etienne Wenger 著, 佐伯 胖 訳, 「状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加」, 産業図書, 1993. (アマゾン)

社会的な組織に参加しようとするものは、通常ただちにその組織の中核に躍り出ることはなく、その周辺位置に参加して、その組織のメンバーの振る舞いや考え方を模倣するところから学習する、というのがその考え方である。「門前の小僧、習わぬ経を読む」というが、「門内の小僧」は、まずは、見よう身まねで もっと学ぶということだろう。

この理論によれば、社会的貢献度の高いすぐれた知性を獲得するのも、非行や犯罪行動を学習するのも、参加しようとする社会的組織のよしあし次第ということに納得が行く。

非行や犯罪を学習する過程を取り上げた研究には、長谷川いずみ, "現代の少年非行と親子関係" などがある。

## (2) 行動変容法、行動療法、作業療法

社会性を獲得できなかつたり、誤った社会性（非行傾向など）を獲得してしまった場合に、これに有効に対応できるのは、いわゆる作業療法である。土と植物に接する協同農作業、手工芸品をつくる手作り協同作業などが効果を揚げている。就労体験で成果を上げているところもある。ほかには、民間療法ではあるが神経症に対応する森田療法なども有名である。

協調学習、参加型学習、グループ学習などの教室における「行動療法」が効果を上げるのは当然のことである。言うまでもないが、私は、これらの学習方法の実践に取り組んでいる一人である。

行動変容法を簡潔に解説したものには、次のものがある。

岡山大学,"ミニマムサイコロジー",学習(第三段階),電子媒体(2006.04.17 確認)

## (3) 社会的学習の理論

社会的学習の理論を体系的に構築したのは、アルバート・バンデュラ (Albert Bandura) である。

[http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/education/2003/\\_3seminar/Bandura.htm](http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/education/2003/_3seminar/Bandura.htm)

<http://saido.at.infoseek.co.jp/bandula.html>

社会的学習理論の中には重要な学習過程として観察学習（モデリング、モデル構築）があるが、その下位には「注意過程」「保持過程」「運動再生過程」「動機づけ過程」という4つがあるとされている。これは、教室で観察される学生の挙動によく合致している。とくにグループ活動を指導すると、顕著に見られるところである。

また、山本五十六の言葉として伝えられる「やってみせ 言って聞かせて させてみて 褒めてやらねば 人は動かじ」も、またこの原理に沿っていると見ることがもできる。

バンデュラの理論には、「自己効力」に関する明快な説明があり、ニートの前駆症状である自己効力感の喪失という社会的アパシー状態を解明する手がかりもあるようだ。

また、人間行動を決定する3要素（自己、環境、行動）が相互に関係しあうという三者相互作用説なども提唱している。彼以前の説では「自己または環境の1つずつが独立に行動を決定する（独立因子、一方向性）」、またはその際に「自己と環境が相互作用する（2因子相互作用、一方向性）」であった。バンデュラの「三者相互作用」の理論は、私の「影響関係モデル」に発展的につながる原始的な仮説を含んでいるようで興味深い。私の「影響関係モデル」は彼のこの理論を含んで完全に乗り越えているのだが、古い理論と私の「影響関係モデル」の仲介をしてくれるようである(1,2)。

さて、このように見てくると、知性の発達、社会とのかかわりによって促進され、獲得された知識は社会性を保持しているということになる。

実は、行動心理学には見るべきものが少ないと感じていたが、認知心理学との境界領域で、最近はこのような成果（社会的学習理論）を上げていることを知り、大いに見直している次第である。

大学の教員ばかりではなく、小中高の教師の皆さんも、ぜひとも、この「社会的学習理論」をじっくりと読んでみていただきたい。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

---

## (19) 金沢大学のいらだち

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/05/19\\_b081.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/05/19_b081.html)

2006/5/8

金沢大学のいらだち--心理、教育、社会性の発達（19）

YOMIURI ONLINE は、5/7 の記事として、下記を掲げた。

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/ishikawa/kikaku/064/13.htm>

---

生活の基礎必修科目に

金沢大学が新生に

---

金沢大は2006年度から、ノートの取り方からゴミ出しの方法、薬物乱用や悪徳商法への注意などの指導を授業として行う「大学・社会生活論」を全新生の必修科目（1単位）として設ける。いわゆる一般常識を大学で教える形だが、文部科学省によると、入学時のガイダンスではなく授業で行うのは「聞いたことがない」という。

大学・社会生活論は前期のみ全15回。毎回テーマを変え、学内外の専門家を講師に招いて講義する。

<後略>

---

金沢大学では、以前から、同様の試みをしていることが知られている。

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/kiko/houkoku050908.pdf>

これを読むと金沢大学の教員の皆さんの焦燥感-苛立ちが痛いほど伝わってくる。この焦燥感、日本全国に共通するもので、決して金沢大学固有のものではない。むしろ、全学を挙げた対策に乗り出しているという点で、まことに特筆すべき快挙と言うべきだろう。

しかし、学生らの評判は、いろいろのようで、父兄らの驚きも隠せない。批判的な学生の代表的な意見は、「こんなことをする時間があるのならば、もっと別の教科に時間を当てたい」というものである。教員らは、通常の教科の講義をしても付いてこれない学生が圧倒的に増えた現状に対する苛立ちを感じているので、批判的な学生の思いと教員たちの思いは完全にすれ違っている。いつの時代も「親心、子知らず」なのだ。おそらく、批判的な学生らは、自分たちの悲惨な有様に気づいていないのである。

一方の教員の側もよく考えなければならないことがある。「ゴミ出しのしかた」、「ノートのとり方」なども、大切である。しかし、これらの知識だけを与えても、これらの学生には効果的だろうか。ゴミの捨て方が悪い学生に注意したことがある教員ならば、何度か「捨て方くらい知っていますよ。ただ、今は、ちょっとうっかりしただけです」という反論を聞いたことがあると思う。彼らは、「(暗記した)知識」はあるのだが、実際には知識を使うべき場面やその使い方を知らないのだ。ましてや習慣になどなってはいないのである。「知性があれば、知識も活きる」が、「知性のない知識は、役に立たない」のである。

「知性を磨く」にはどうするのか。昔は、賢人の書物を読んで仮想的な知的体験を積むことによって知性は磨かれた。今の学生が賢人の魂に触れて感動するだけの事前体験をしているだろうか。否である。社会のいろいろな出来事を理解し、賢人が対処した感動的なドラマを理解するには、それ以前に家族や学校、地域などでの人とのふれあいや、交流、社会の成り立ちや、組織の中での立ち居振る舞いのイロハを知らなければ無理というものである。

社会性の発達なくして知性の発達はないのである。知性なくしてマナーを教えても、マナーは丸暗記されるだけで、実際の間では利用されないに違いない。金沢大学の先生方に僭越ながら申し上げます。学習と生活のマナーを学生たちに教えるという偉業に心から敬服いたします。多くの大学でも見習うべきでしょう。しかし、他方、学生たちに社会性の獲得を促す手助けもしていただければ幸いです。もちろん、他の大学においてもです。

高校までの各学校(幼小中高)の先生方にもお願いです。子供たちに孤立と競争を教えるだけで済ませることは辞めてください。社会貢献こそ、わが身を助けると教えてください。子供たちに互いの信頼と協調とを教えてください。仲

間たちと力をあわせた行動の成果を褒め称えてください。社会では、人は知識の寡多で評価されるのではなく、人をいかに助けたかで評価されるという事実を教えてください。

キャンパスで、学習と生活のマナー教育をすることとともに必要なもう一つの提案を次の記事には書きたいと思う。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

-----

## (20) キャンパスメイト制の提案

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/05/20\\_31a1.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/05/20_31a1.html)

2006/5/9

キャンパスメイト制の提案--心理、教育、社会性の発達 (20)

以前、キャンパスメイト制の導入を提案したところ、会場での反響もあったが、その後の反響にも大きなものがあった。

ネットで「キャンパスメイト制」と検索すると、このことを取り上げた私のブログの記事「一人にしない教育者と、一人にしない教育を--感性的研究生活(6)」が出てきてしまうくらいである。

海外の教育事情に明るくないのだが、アメリカのいくつかの大学では、CampusMateProgram という名称で、私が言うキャンパスメイト制に近いものが導入されているようだ。

私が提案するキャンパスメイト制は新生と先輩ボランティアをセットにするもので、下記のようなものである。

キャンパスメイト制--私の提案

-----

新生 4-5 人に先輩ボランティア 1-2 名でキャンパスメイトを作る。

大学生活のイロハを先輩とともに体験する。

先輩ボランティアにはあらかじめ「ノートのとり方、ごみの出し方」などの講習を受けてもらってメイトリーダー資格を与える。講習は半期 15 回相当の選択制

で、1単位を授与が望ましい。メイトリーダのボランティアを1年間実践したら、さらにもう1単位授与するというもの良い。  
優秀なメイトリーダは表彰する。

国内では、「キャンパスメイト」というソフトウェアパッケージが売られていたり、大学のホームページに「キャンパスメイトのページ」があったりするが、人間の制度としてのキャンパスメイト制はないようだ。

私のイメージに一番近いキャンパスメイト制は武蔵大学のキャンパスメイト制で、もっぱら留学生を対象にしたものである。武蔵大学の試みは大いに賞賛すべきである。しかし、一方、今の日本人の学生も、親元を離れた留学生のようなもの、海外からの留学生と同様にキャンパスメイトをつけてあげなければ大学生活と学習のマナーに戸惑うばかりというのが実情なのではないだろうか。また、私の提案は、サークル活動に参加すればおのずと解消するという意見もないとはいえないが、学生のサークル離れは言われて久しいし、現在のサークルが以前に比べるとこれらの機能を果たしていないように思えてならない。大会で優秀するためのジムや訓練所にはなっているにも社会性の獲得には無関心な指導者が多いような気がする。実際、指導者たちは社会性の獲得の教育を受けてこなかった世代なのだから止むを得ないとも思われるのである。現在の指導者たちが受けたころ、教育現場に立っていた教員はすでに「社会性を教育することを知らない」世代だったのだから（[「教育心理学」の限界と希望、やはりあった「教師の本音」](#)）、まったく止むを得ない現象なのだ。ましてや、学生たち同士に任せていては、成果に大きなばらつきが生まれる。

私は、すべての講義でグループ学習を導入して、学生らの助け合う活動を奨励しているが、学生任せにしていれはうまくゆかないのには100余の例がある。常に教師が愛情を持って学生らの活動を見守っていて、いつでも手助けしてあげるつもりでなければうまくは行かないのである。本来の社会性は彼らの体の中にあるので、少しだけ手を貸してあげれば、息せき切ったようかれらは成長する。その瞬間がたまらなくて、今日も私は教壇に向かうのである。

#### 参考

1) 私の提案に一番近いが、留学生対象に限定。これを新入生全体に拡大適用したら良いと思う。

[武蔵大学の留学生向けのキャンパスメイト制度](#)

2) 人間ではないキャンパスメイト制

[富士通の製品](#)

[横浜市立大学のサービス](#)



### 3)その他の例

#### 学生アルバイトの例

(キャバクラの店名にもこの種のものがあるようだが、当然ながら割愛した)

いろいろな大学で、各大学の実情にあった大学の新生向けのキャンパスメイト制を導入してみてもいいだろうか。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

-----

## (21)いまだき学生の人生観と学習モチベーション

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/06/21\\_3529.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/06/21_3529.html)

2006/6/25

いまだき学生の人生観と学習モチベーション--心理、教育、社会性の発達 (21)

人生観と学習:「エイトキュービックモデル」の提案--感性的研究生生活(13)で述べたように、私は、学生らの人生観と学習モチベーションの関係を部分的ではあるが実証的に捕らえることにどうやら(やっと)成功したようである。これまでは、このあたりの捉え方はすべて勘に過ぎなかった。他の教員の皆さんに説明しても、いろいろに誤解されるばかりで、正しくは伝わらないもどかしさを感じていた。完璧とはいえないが、事実の一端はしっかりつかんだ。これは紛れもない証拠である。

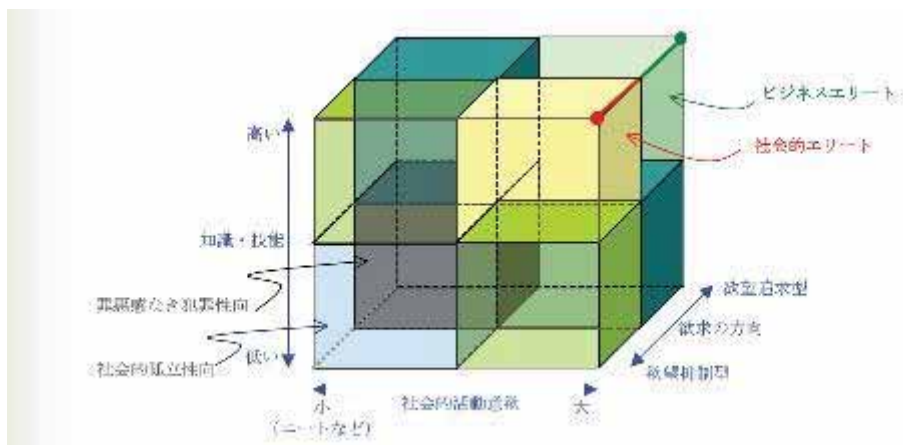
私は今回の発表で、いまだきの学生の人生観は、次の2軸で説明することが大筋可能で、これらと学生らの学習効果の軸が密接に関係することを示した。

(a)「私欲追求大-私欲追求小」の軸

(b)「社会的評価追求大-社会的評価追求小」の軸

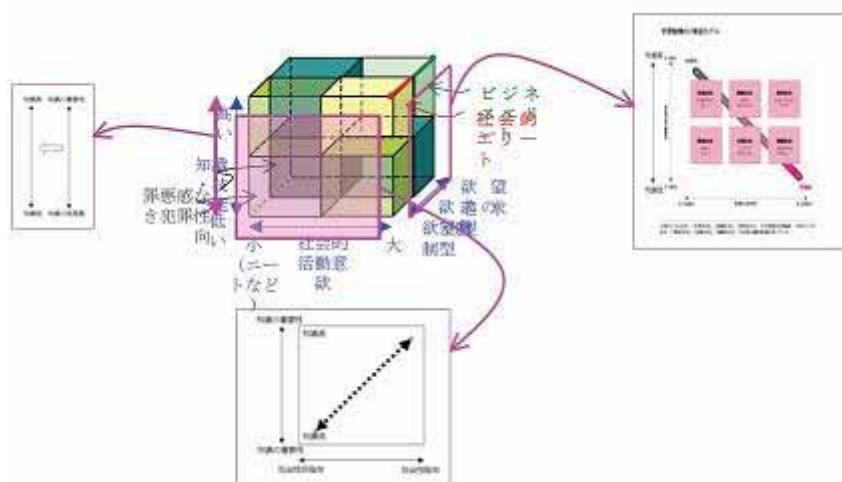
上記2軸(a,b)を従属変数とみなして下の学業成績(c)を目的変数とみなしてもよいかもしれないが、ここでは、その考え方はとらない。学生らの学習経路は迂回路がいくつか考えられるので、学業成績の向上が社会性獲得や私欲抑制に向かわせる可能性もある(と願望している、といったほうがよいかもしれない)。したがって、3つの軸は、極力対等に扱うことにする。

(c)学習効果(学業成績)の軸



各軸を大胆に大小2つずつに分けると、学生らは(a) × (b) × (c)=2 × 2 × 2 の8つの立方体に分布する。この新しいモデルを「エイトキュービックモデル」と私は呼ぶことにした。現行入試制度のおかげで学生らは成績で輪切りにされ、入学当初は横一線で入学すると考えられる。その後の学業成績がどこまで向上するかが、教師の腕の見せ所となるわけである。とはいえ、学業成績の伸びは、学生本人の資質と努力にも左右されるので、比喩的にいえば学生の能力と教師の能力の掛け算で決まるということになるのだろう。

「エイトキュービックモデル」は、上に掲げた。



先行するモデル（「成績で釣る--自己撞着的モデル（図の左）」「社会性の獲得と知能の増加--社会的学習モデル（図の下）」「市川伸一の外的要因・内的要因-2要因モデル（図の右）」と私の「エイトキュービックモデル（図の中央）」の関係は、上図のようなものである。

いずれのモデルも、乱暴に言えば「エイトキュービックモデル」を一平面に縮約したり、1次元に縮約しているものになっていると考えられる。

ちなみに、2 要因モデルは、市川伸一、“生徒の発達段階に応じた動機づけの手法を考える”、情報教育サイト、ベネッセ、

[http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2004/04/01toku\\_05.html](http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2004/04/01toku_05.html)

(2006.06.23 確認) を参照した。

さて、この「エイトキュービックモデル」に基づいて、学生らにアンケートを実施した。アンケートの実施時期は履修面接時または初回講義の日である。

A 大学 (情報基礎、1 年生、文科混成)、C 大学 (電算機概論、1 年生、経営工学)、E 大学 (情報処理、1 年生、商学部) に実施したアンケートでは、3 大学をあわせて 159 名から回収ができて、142 名分が有効回答となった。

着目したのは、次のアンケート項目である。

-----  
(前略)

## 6 . 人生についての考え方

### 6-1. お金や財産について (択一)

お金や財産は、他人よりも多く持つことが人生の目標だと思う

お金や財産は、人生の目的とは思わないが、人並みに持ちたい

お金や財産に特別な興味はない

お金や財産に目がくらむような人にはなりたくない

その他 (具体的に: \_\_\_\_\_ )

### 6-2. 人や社会との交わりについて (択一)

人や集団と交わって生きてゆくことが楽しい

他人や仲間が喜んでくれたり、他人や社会に役立つ人になりたい

他人や社会に交わるのはできるだけ少なくなして暮らしたい

他人や社会に煩わされずに生きていたい

その他 (具体的に: \_\_\_\_\_ )

## 7 . 教室運営について

### 7-1. (省略)

### 7-2. 知識の獲得について (3 つまで選択可)

資格などに結びつく専門的なことを覚えたり、技術を身に着けることが、大学の授業だと思う。

思考の方法や社会の仕組みなど、資格などに結びつかない話は無駄だと思うので、教師はしないで欲しい。

他人よりお金や財産が得られるような知識や技術を学びたい。

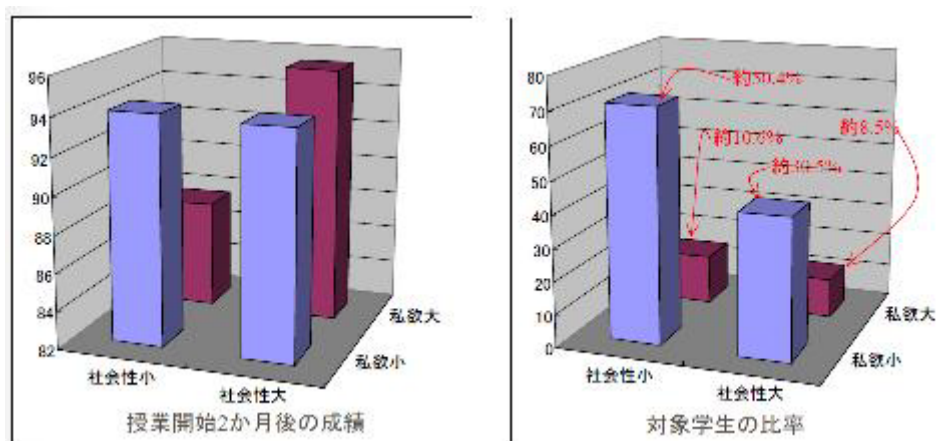
思考の方法や社会の仕組みなど、どんな場面でも生きてゆく上で手がかりになるような深い知恵こそ、大学で身につけたいと思う。

思考の方法や社会の仕組みなどの基礎的で深い知恵と、専門的な知識や技術をバランスよく、学びたいと思う。

よりよい社会の実現のために、自分も貢献できるような深い知恵を学びたい。

その他（具体的に： \_\_\_\_\_ )

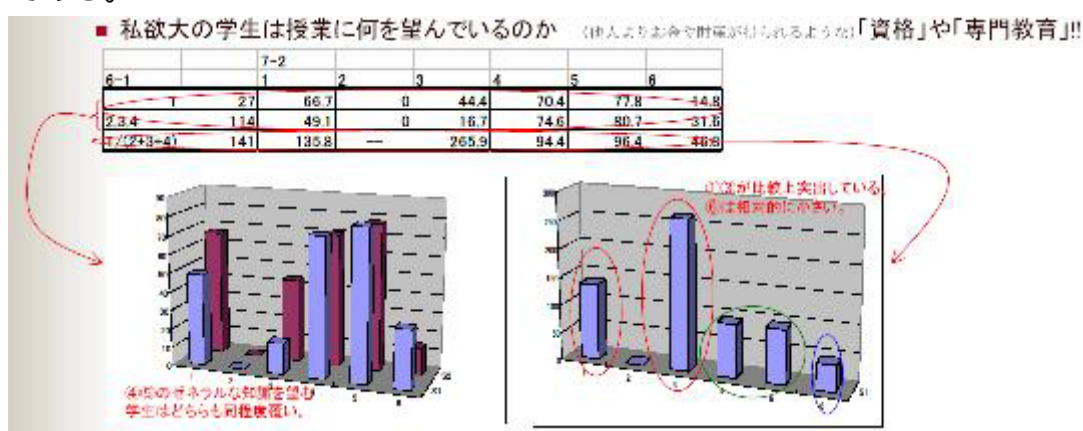
6-1 では 選択肢を選んだ者を私欲が大きい者、6-2 では と を選んだ者を社会活動への意欲の高い者とみなした。該当する学生は 2×2 に分類される。これらの学生の構成比率は、下図の右のようになった。赤字で書き込んだ数字が各部分の比率である。



「私欲小×社会性大」という社会的リーダーの可能性を示す学生が 30.5%いるというのは頼もしい。ニート予備軍である「私欲小×社会性小」のグループが 50.4%と相変わらず他を圧倒しているのが目立った特徴である。しかし、私欲大グループが社会性の大小を問わなければ合計で 18.6%と無視できない比率を占めていること、中でも犯罪を犯す危険性が高い「私欲大×社会性小」の学生が 10%も占めているのは、かなり憂慮すべき事態であると思われる。このような危険性は 10 年前にはこれほど大きくはなく、1-2%程度ではなかったのか、と思う。経年調査してこなかったのが、数字で示すことは難しいが、教室での実感からはそう感じている（発表では、私の教室での実感を図示して示した）。私欲大グループは、ひたひたと忍び寄るように増大しているというのが実感である。これら 4 つのグループに属する学生らが 6 月第一週までに得ている成績をクロスして得られたグラフが上図の左の図である。入学時には、ほぼ全員が 60 点程度の成績であったと仮定すると、成績の悪いグループが平均 80 点、よいグループは平均 90 点程度に上昇したものとみなすことができる。これは過去の実績に照らしても妥当な結果である。中間的な成績は出席点と毎週の課題成績によっており、これから迎える期末テストの成績は反映していない。最大多数のニー

ト予備軍（「私欲小×社会性小」のグループ）の成績が、上昇しているのは、ここ2年ほどの実感と一致しており、このようになるまでのその前の3年間の悪戦苦闘（笛吹けど踊らず）の成果であり、私としては心底誇りにしたい部分である。2005年度と本年度の成功は、それまでの学生参画型の授業に加えて、「社会の成り立ち」という講義を追加したことによるものであると確信している。2005年度と本年度の成功によって、学生らの多くの学業成績の向上が図れたことになるが、ひたひたと忍び寄る「私欲大」の学生たちには、学業成績の向上が弱いままである。

彼らは、いったい何を望んでいるのかというアンケートの結果は、次のとおりである。



よりよい社会の実現のために、自分も貢献できるような深い知恵を学びたい。(46.8%)

これからは、これら私欲優先型学生向けの「資格対策コース」を別に立ち上げるか、入学時に切り捨てるのか、通常授業でも専門家教育的要素を取り入れるのか、といろいろな戦略が考えられるのであるが、それぞれの大学運営の方針と絡むところなので、一非常勤講師には判断が難しいところである。

2-3年生に対するアンケートの調査と成績の関係も調べたが、私が担当する2-3年生はすべてA大学の情報コミュニケーション学部の学生である。この学部の1年生は私の講義を受けていない。アンケートの結果は学部の特殊性なのか、上位学年に特有の現象かの判断は困難だが、ニート予備軍(「私欲小×社会性小」のグループ)の数が、80%を超えるというきわめて特異な分布を示しており、コミュニケーションに困難を感じずる学生らが入学していることを示しているものと推定される。2-3年生なので当然専門性の高い教育を実施しているためか、私欲優先型学生群の成績の伸びは大きいですが、逆に「手や体を動かしながらの協働参画授業」とはなりにくいために、ニート予備軍(「私欲小×社会性小」のグループ)の成績の伸びが芳しくないことが判明している。私はこの学部の1年生の教科を担当していないが、できれば1年生のうちに克服していただきたい問題ではある。この事実=[教室にやってくる2-3年生はいずれもニート予備軍(「私欲小×社会性小」のグループ)が圧倒的に多い(83.0%)]は、今回の発表のため作業を通じて、私も初めて知ってかなりのショックを受けているところである。

さて、「エイトキュービックモデル」の有効性ははっきりとした。これには、私はかなりの満足である。学生の人生観と成績の伸び率は大きな関係があり、教師が適切な授業戦略を持って講義に望めばかなりの改善が見込めるだろうところは推測できることになった。

しかし、では、では、具体的には、どうするか、、、。来週からの授業をまた一から考え直さなければならぬだろう。悩める大学教師の試行錯誤は、まだまだ続くことになる。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

-----

## (22) 「人生はお金」の学生に効く言葉

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/06/22\\_97f0.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/06/22_97f0.html)

2006/6/29

「人生はお金」の学生に効く言葉--心理、教育、社会性の発達(22)

### 1. 学生の人生観 4 区分と 8 キュービックモデル

私は、今週、すでに 3 大学 6 コマの講義を済ませている。明日は「情報システム論」と「情報デザイン論」講義を行う。明日の講義終われば、[href="http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/06/13\\_ba6d.html"](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/06/13_ba6d.html)先週末の「次世代大学教育研究会」の発表以降に実施される講義はすべて一巡することになる。

発表までは、これに間に合わせるべく発表資料を作らなければならないし、そのためのデータの整理もおおわらわだった。発表後、突然、実はとてつもない宿題を負っていることに私は気がついた。

研究会で、私は、いまどきの学生たちの人生観は「社会活動への意欲のある .vs. なし」×「人生はお金だ、YES .vs. NO」という直交する 2 軸で分析できるということを示した。

	社会活動意欲大	社会活動意欲小
人生は金じゃない	(A)	(B)
人生はお金だ	(C)	(D)

この分析は正解だった。(A)(B)(C)(D)の各グループは、場合に応じて成績が伸びたり伸びなかったり、まとまった動きを示してくれた。この 4 グループに学習成果の大小の直交軸を加えると、立体的な 8 区分になるので、8 キュービックモデルとなったのである。

### 2. どの種類の学生に教えるのか

一般論として、高等教育に進んでくる学生は、「社会活動意欲がある」×「人生は金じゃない」グループ(A)と考えられていて、このグループ向けに教育がされてきた。実際、このグループは、ハナから社会的リーダーになりうる資質が備わっている。その他の(B)(C)(D)の学生群は切り捨てても、人数的には問題にならなかった。よい教師は「もっと社会に目を向けろ」「人生金だなんて見捨てろ」といっていればよかった。今でもそういう熱血教師はいる。

10年前は、このグループはおそらく90%を占めていただろう。今回の調査の結果では実に30%しかいなかった(1年生対象分、以下同)。

### 3. ニート予備軍は無視できない大群

しかし、私はニート予備軍の学生が大量に発生していること、そして彼らは、「社会活動意欲がない」×「人生は金じゃない」グループ(B)だろうとめぼしをつけた。このグループは10年ほどには5%位だっただろう。しかしこの種の学生は徐々に拡大して、今回の調査では実に50%に達していた。教育起因性でしかも教師からも見捨てられ放置された学生の大半がこのグループに属しているのである。このブログのシリーズ「心理、教育、社会性の発達」はこの点に焦点をあわせてきたといってもよいだろう。(B)に無理に「金を稼げ」と仕込もうとした教師は多かった。政治家や行政は無批判にこの方針を推奨してきたように私には感じられる。ところがこの学生らは「そんな下劣なことはできっこない、大人ってキタナイ」という心理的抵抗を超えることはなかった。私が行った方法は、学生らの破壊された社会性を再構築するという果てしない徒労とも思える方針だった。学生をグループに分け、グループでの活動を推奨した。調査も手分けして協力すれば早くよい結果がでることを体感させた。グループ活動の成果はどんどん発表させた。グループ活動の楽しさを徹底的に体感してもらったようにした。

その努力の甲斐があって、いくつかの大学ではこのグループの学生も社会性を再構成することに成功し、学習効果も上がった。単位を落とす学生が目に見えて減った。私の教え子にニートは少ないだろうと思った。しかし、1つの大学だけはどうしても成功とは呼べないクラスがあった。グループ活動を呼びかけても、他大学のようにすぐに立ち上がって集まって相談を始めるような様子はない。ちょっとだけ互いの様子を窺うが、立ち上がらない。そばに行って手をとって、さぁ話し合おうと語りかけても男の子は下を向いて、身を硬くしている。他の学生と話し合うのが怖いのだ。密かに冷や汗をながしている学生もいる。2005年6月ころ、思い立って、この大学のクラスでは[講義の演題とは一見関係なさそうな「社会の成り立ち」の講義を実施した。](#)ロビンソンクルーソーの話をして「おおむねヒトは社会なしには生きてゆけない」といったり、「単位組織では、一人は他のメンバーのために1つ以上役に立ち、仲間は互いに助け合い、そのグループは社会に貢献する」という話をした。学生は、シンとなって、私の顔を凝視したり、うつむいたり、上を向いて涙をこらえていたりした。この日の講義の感想文には「大学を出たら、金ばかりの人生かと生きていも仕方がないような気がしていたけれど、違うことがわかってほっとした」「他人はすべて敵と言われ続けていたので、社会に出たら、できるだけヒトとかかわら



ずに生きていたいと思っていたが、ヒトはみな支えあって生きていとわかってなんだか涙が出てきた」と書いた学生もいた。

学生たちは、無理やり社会性を奪われ、心を捻じ曲げられていたのだ。彼らの十数年の成長期に占める私の話はたった1時間半。わずかなものに過ぎないが、閉じ込められていた本来の自然な心は解放されたのだらうと確信した。続いて、すべての大学で同じ講義を実施した。今年は4月の早い時期にこの講義を行った。手ごたえは十分だった。

彼らの学習効果も上がった。今回の調査では、どの大学の学生も(A)グループ(30%強)だけではなく、(B)(C)グループ(それぞれ、50%強、8%強)もすべて好成績にランクされた。圧倒的な成功だった。それは私にとって誇りにすべき快挙だった。

しかし、発表しながら、心は晴れなかった。わずか10%強とは言え、成績が十分あがない(D)グループがいるのだ。好成績グループは平均90点くらいになっていた。そうでないグループは平均80点というところだ。これは過去の実感からみても矛盾はない。平均80点くらいの伸び悩みグループの裾野にいる学生は単位を落とすのである。

この10%を救う手立てはないのか。私は悩んだ。

#### 4. 「人生は金」×「社会性なし」の学生

「人生観=人生は金」×「社会性なし」の学生について考えてみる。社会性のない人格のまま社会に入っていったらどうなるだろう。社会のルールは彼らにとって快いだろうか。ウザツク感ずるだけだろう。社会のルールをウザツク思いながら、金と財産を追い求めたら何が起ころうか。自分でコツコツ稼ぐようなことはまだろこしく感ずるのではあるまいか。手っ取り早く、会社の金庫から金をわしづかみにしても心に痛みは感じないだろう。この性格でそこそこかしこければHモンやMファンドの代表くらいにはなるかもしれない。いずれにしてもそれは犯罪である。すなわち(D)グループは犯罪予備軍と言ってよいに違いない。

彼らを放置してよいのだろうか。というと、すぐに「犯罪予備者にお前は迎合するのか」という交ぜっ返しが聞こえてきそうである。いな、そう言われた経験もないわけではない。「迎合」するのではない、正しく導く方策はないのだろうかということである。まあ、私が「何かよい方法は?」とたずねたのがよくなかった。解を用意しない質問は嫌われる。学生もよく平気で「答えを教えてくださいなければ解答できません」などというくらいだから、大学教師だって似たようなものである(?)。

## 5. 「専門性獲得」と「人望の獲得」と「時の運」

今週、各大学の教室で、私は10%の学生に語りかけた。

実は、この学生たちは、私の講義を突につまらなそうに聞いている。たまに寝ている学生もいるが、このグループに属する者たちが多い。おきていても、青ざめた顔をしていて、いかにも義務で座っているという風情なのだ。金にもならない話など聞きたくもないのに、という不満が顔に満ちている。学生の授業評価を実施すると「役に立たない話ばかりでつまらなかった」「答えも教えてくれないで、問題を解くように言われた」というような悪評価(と本人は考える)を激しく書き込むのもこのグループである。

私は、いすから立ち上がってしっかりと前を向いて話し始める。

-----  
統計によれば、「人生の目的は他人よりもお金や財産を持つこと」と回答したヒトは全体の2割弱(18%強)だった。そのうち、社会とかかわりを持つことに喜びを感じずるヒトが8%、ヒトとかかわりを持ちたくないヒトは10%だった。

君たちにはまず、次のような注意をしたい。君たちの多くは、「人生は金じゃない」と答えたクラスメイトが信じられないでいるに違いない。「本音は金だと思っているのに、オモテを飾っているだけだろう」と考えているヒトもいるだろう。しかし、それは間違いだということに注意しておきたい。人生観は人それぞれだが、「人生は金じゃない、棺おけに入るときに周りの人たちに惜しまれて感謝されるようなヒトにこそなりたい」と本気で思っているヒトは多いということを知ってほしい。私もその一人だから、お金はないが、幸いヒトには感謝される後半生を送っている。実際のところ、君たちとこのクラスで過ごす時間が一番楽しい。お金には換えがたい喜びだ。

君たちは、少数派なのだということに自覚してほしい。8割の学生は「人生は金じゃない」と思っているんだよ。

さて、それでは「人生はお金だ」と思っている君たちは間違っているのか、といえば、間違っているわけではないということもはっきりと言いたい。人生観は人それぞれで、誰が間違いということはない。8割強の学生も間違いではないが、2割弱の君たちも間違いではない。それは思想信条の自由というものである。ただし、「人生はお金だ」のうち「社会性小」の10%の人たちは、他の人々に比べて犯罪を犯しやすいということをよく考えてほしい。自分が、少なくとも犯罪者にならないように心を配ってほしい。警察のご厄介になればお金も財産も失うことになるということをよく理解しておいてほしい。

<ここで、該当する学生らが、驚いたように顔を上げて私を見る>

さて、ここからが大切なところだ。お金を稼げるようになるには、3つの条件がある。

<私は次の3項目を板書する>

専門性を身に着ける。

人望を集める。

時の運に恵まれる。

「時の運」は、ヒトにはどうにもならないが、初めの2つは自分の努力しただ。

<顔を上げた数名の学生は、あわてて板書した3つをノートに書き写す>

他人よりも高い専門性を身に着けなければ、他人から尊敬されないしお金も地位も提供してもらえないね。人望がなければどんなに高い専門の知識や技能を持っていても誰も相手にしてくれないよ。自分と周囲のヒトの間の関係をよく観察してみて、自分の人望にかけているところがあれば、それを克服する努力をしなくちゃいけないね。

我田引水だが、高い専門性を目指すならば、私のこの講座くらいは、軽くクリアしておかなくちゃいけないのではないだろうか。

<うんうん、と同じ数名がうなづく>

手ごたえはあった。私の言わんとしていることは伝わったような気がする。いや、まだ気がするだけかも知れない。しかし、私は私の学生らの理解力を信じている。きっとわかってくれたさ。私は自問自答している。そして、明日もまた自問自答することになるだろう。

結果は、期末テスト後の成績評価（総合評価）の後に見ることにしよう。やや大げさだが、私は、不安と期待で胸がつぶれそうだ。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

## (23) 学生たちの人格障害と学習能力

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/08/23\\_2cfe.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2006/08/23_2cfe.html)

2006/8/21

学生たちの人格障害と学習能力--心理、教育、社会性の発達（23）

### 1. いまどき学生の人生観の4タイプ

[このシリーズの2つ前の記事「いまだき学生の人生観と学習モチベーション--心理、教育、社会性の発達\(21\)」](#)で、私は学生らに実施したアンケートから学生の人生観を4つに分類し、学習効果を検証した。

	社会活動意欲大	社会活動意欲小
人生は金じゃない	(A)	(B)
人生はお金だ	(C)	(D)

健全に社会性の発達がされ貢献満足型の人生観を持つ(A)グループの学生(正常な人格を有する学生)は全学生のわずか約30%+であり、ニート予備軍とも言うべき(B)グループ「社会性の発達未熟×貢献満足型人生観」の学生が50%+と大勢を占めていること、ビジネス勝者の可能性もある(C)グループ「社会性は発達して×私欲優先型人生観」は8%+にとどまり、犯罪者予備軍とも言うべき(D)グループ「社会性の発達未熟×私欲優先型人生観」が10%+に急増していることを示した。

「社会性の発達未熟×私欲優先型人生観」の(D)グループ学生とは、この記事で実は「反社会性人格障害者」であることを示したい。

[とり急ぎ、彼らに対処するための手がかりについても述べた\(「人生はお金」の学生に効く言葉--心理、教育、社会性の発達\(22\)」](#)。しかし、これは、とりあえずの考え方に単にとどまっている。彼らに、いかに教えるかをさらに考えを進めると、その困難性はいっそう深いことがわかってくる。

社会性の未発達な学生集団には、「(B)グループ(ニート予備軍)」と「(D)グループ」の2つのグループが存在する。彼らの違いは明白であり、人生観が私利私欲優先か否かではっきりと異なっている。現在の学生の大勢を占めるのがこの「ニート予備軍」であり教育の成否は「ニート予備軍」の心を奮い立たせることができるかどうかにかかっているといてよい。昨年度と本年度で、私の教育実践では「ニート予備軍」に対する教育努力の方法が見えてきている。学習効果も確かに上がってきた。見えてきたところで、他方に、教師である私がどう努力してもある一部の少数の学生の学習成果があがらない事実直面していたのである。この一部の学生こそ、(D)グループであった。

## 2. 人格障害

「DSM - - TR」というものがある。正式には、『精神障害の診断と統計の手引き』(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)というもので、アメリカ精神医学会の定めたものである。これはアメリカの実情に沿って、患者を診断する際の指針を定めたもので、日本でもある種の標準として利用され

ている。現在は第4版の一部改定版が出ていて、「DSM - - TR」と呼ばれているのである。原因や病理を問題にせず、現象だけに着目して分類するというプラグマティズムはいかにもアメリカ流である。まあ取り掛かりとしてはそれでよいのかも知れない。一方で、日本の実情には合わないという指摘もされている。「文化的平均からずれている」が人格障害の判断基準となるので、異なる文化の間では判断も分かれてしまうことになる。

しかし、日本には統一的診断の基準が未確立なので、「DSM - - TR」が日本でも基準となっているといってもよいらしい。

この基準によれば、人格障害には、次の10種類が存在する。実は11種類あったが、ナチスとユダヤの関係評価に関連して混乱が生じたので、1種類を減らしたという時代的便法も取られている。ここでは、11種類説をひとまずおいて、10種類説に従う。

- ・妄想性人格障害
- ・分裂病質人格障害
- ・分裂病型人格障害
- ・反社会性人格障害
- ・境界性人格障害
- ・演技性人格障害
- ・自己愛性人格障害
- ・回避性人格障害
- ・依存性人格障害
- ・強迫性人格障害

これらは、「DSM - - TR」の中では次の3つのグループに分類されている。

#### A グループ

「妄想性人格障害」「分裂病質人格障害」「分裂病型人格障害」

- ・遺伝的に分裂病気質を持っていることが多く、自閉的で妄想を持ちやすい。
- ・奇妙で風変わりな傾向があり、対人関係がうまくいかないことがある。
- ・ストレスが重大に関係することは少ないが、対人関係のストレスには影響を受ける。

#### B グループ

「反社会性人格障害」「境界性人格障害」「演技性人格障害」「自己愛性人格障害」

- ・感情的な混乱が激しい。
- ・演劇的で、情緒的で、うつり気に見えることが多い。
- ・ストレスにかなり弱い。

#### C グループ

「回避性人格障害」「依存性人格障害」「強迫性人格障害」

- ・不安や恐怖感が非常に強い。
- ・まわりからの評価や視線などが非常にストレスになる。

このような分類分けも、診断の手かがりにはなるだろうが、あくまでも見かけ上の様子が似ているという点での分類である。10種類的人格障害がどのような人生観と結びついているのかを考慮したものではない。

私は、この記事の次の項で、10種類的人格障害がどのような人生観と結びついているのかを提案してみたい。

### 3 . 人格障害と人生観

#### 3-1 心象の検証能力

10種類的人格障害がどのような人生観と結びつけられるかを検討する前に、ひとつの準備が必要である。

以下は私の考えに過ぎないが、実に人格障害をうまく説明できる、と内心では自慢の分類である。

人格障害の種類といわれる中に、どうやら病者がもつ認知のミステイクの仕方の違いによって分けられているものがありそうなのである。

---

#### ・心象の検証能力が正常な人

認知の仕方といってもいろいろな側面があるだろう。ここで問題にする認知の側面とは、人は外界に関する心象を心（脳）に描いて、これに基づいてその先の思考や行動を行っているという側面のことである。外界に関する心象は大切である。これが間違っていたら、間違った思考と行動の原因となる。正常な人は自分が持つ外界に関する心象がその時点で正しいかどうか、常に現実にフィードバックして確かめ、現実と心象に大きな食い違いが生じていないことをすばやく確信して新しい思考や行動に進んでゆく。

#### ・心象の検証能力を過信する人

もし、現実と心象に食い違いがあるまま、それを正しく判断することができず、誤った心象にとらわれてその上に新たな心象を築いてゆくと、現実との差異はますます大きくなってゆき、正常な判断ができなくなる。ひとつの心象が役に立たなくなると古い心象も検証されないまま残存し、一方では新しい別の心象が発生することもあるに違いない。複数の心象が訂正されずに成長して、矛盾したままになってゆく。これが統合失調症といわれる現象だろう。

#### ・心象の検証能力にいつも不安な人

一方、現実と心象に食い違いがあるかどうか不安を感じて決断することができないケースもありうるだろう。この人たちは、次の思考をどのように進めた

り次の行動をとったりしてよいのかの決断ができない。利己的であれば他人を利用しようとして他人の判断に依存したり他人の親愛を過剰に確保して身を守ろうとしたりする。利己的でなければ、自分一人で前に出ようとして混乱に満ちた言動をするようになる。

すなわち、「外界についての心象を検証せずに過信してゆくタイプ」と、「正しく検証するタイプ」と、「検証する方法を身につけていないことに不安を抱いているタイプ」の3通りのタイプがあると、私には思われるのである。

### 3-2 人格障害と人生観

前記の心象検証能力に関する3タイプのそれぞれに、人格障害と人生観を当てはめたものが、以下の表である。

#### 心象検証能力-過信

分裂病型人格障害	妄想性人格障害	利己的人生観
分裂病質人格障害	強迫性人格障害	貢献満足型人生観
社会的活動意欲なし	社会的活動意欲あり	

#### 心象検証能力-正常

反社会性人格障害	自己愛性人格障害	利己的人生観
回避性人格障害	正常な人格	貢献満足型人生観
社会的活動意欲なし	社会的活動意欲あり	

#### 心象検証能力-不安

依存性人格障害	演技性人格障害	利己的人生観
境界性人格障害		貢献満足型人生観
社会的活動意欲なし	社会的活動意欲あり	

ピンクは「DSM - - TR」のAグループ、肌色はBグループ、ブルーはCグループである。若草色は正常な人格である。

A,Bグループはややまとまりを見せている部分もある。Cグループは「DSM - - TR」で「その他」的な扱いのグループなので、私の分類ではバラけているように見える。

「DSM - - TR」はあくまでも見かけの分類、私の分類は心象検証能力と人生観による分類なので、異なった様相を示しているのである。

[私がアンケートで見つけた学生の4つのグループ](#)は、上記の3つの表の真ん中に対応付けられる。

	社会活動意欲大	社会活動意欲小
人生は金じゃない	(A)	(B)
人生はお金だ	(C)	(D)

一番上の表や下の表の学生は、存在するに違いないが、それほど顕著ではないということだろう。上下の表のようにここまで標準から外れてしまうと現在の上位～中堅私立大学の入試には耐えられないかも知れない。しかし、大学全入時代となった今は、この分類の学生たちも今後は多数入学してくることを考えなければならず、受け入れ側の体制がなければ大変なことになるのは目に見えている。

私の4分類と真ん中の表の分類を対比してみよう。

(A) グループの学生--「正常な人格」

健全に社会性の発達がされ貢献満足型の人生観を持つ正常な人格を有する。

(B) グループの学生--「回避性人格障害」

ニート予備軍とも言うべき「社会性の発達未熟×貢献満足型人生観」の人格である。

(C) グループの学生--「自己愛製人格障害」

ビジネス勝者の可能性もある「社会性は発達して×私欲優先型人生観」の人格である。

(D) グループの学生--「反社会性人格障害」

犯罪者予備軍とも言うべき「社会性の発達未熟×私欲優先型人生観」の人格である。

ところで、「反社会性人格障害」の人は、正気の人を敵視していて、正気の人からは学ばないという特徴を持っているのである。[教師である私がどんなに心を砕き「人望なくしては財貨なし」と教えようとしても](#)、教師はうそをついている、としか彼らの心には達しないのである。これでは学習効果は上がらない。このことは、手元のデータにもはっきりと現れている。

「反社会性人格障害」については、別の記事でもう一度詳しく述べることにするが、通常、世界的にはヒトの2%程度(アメリカの場合、男性3%、女性1%程度)といわれている。しかし、今年実施した私のアンケートでは、実に学生の10%+ に達している。



私の記憶にある限りでは、10年前の日本ではこの種の学生は全体の1%~2%にすぎなかったと思われる。これは世界的平均にも近いのでそれほど大きな狂いはないはずだ。今回のアンケートでは、とり方にもよるので数値自体に大きな意味があるとは思えないが、反社会性人格障害は、実に急速に増大しているというのが実感である。日本の社会はこのままでよいのだろうか。大学の教育はよいのだろうか。いや、高中小幼の教育はよいのだろうか。家庭には問題はないのか。考えるほどにますます心配になってくる。一度崩壊した文明社会は2度と再生したことがないのである。日本の文化は再生できないほどに崩壊してしまうのでないか。

私は、人格障害があれば直ちにその人を排除するということには組しない。まずは、開かれた社会と開かれた教育が対応すべきだと思うのである。

特に社会性未発達障害については「多すぎる、社会性の発達阻害の原因--心理、教育、社会性の発達(15)」の中で次のように書いた。

「社会性の未発達」は、心理学の世界では、「精神障害」と位置づけられているに過ぎない。日本には、70万人とも100万人とも言われるニートがいる。その数は日々増加している。彼らのすべてが「精神障害者」なのだろうか。薬漬けにする以外の方法で彼らを救う方法はないのか。否、それ以前に、彼らが「精神障害者」であるならば、これほどの多数の「精神障害者」を生み出してしまふ社会的教育システムになんらの問題もないというのだろうか。これほど多数の「精神障害者」が本人の遺伝的特性、または家族性に起因するとすれば、世界史的大発見である。日本人は精神障害者民族ということになるだろう。「社会性の未発達」は「精神障害」ではなく、正しくは、心理的未発達状態であると考えるべきである。

「社会性の発達」を扱う学問の分野を新たに起こす必要があるのかも知れない。

心配すればきりがなく、私が叫んだくらいでは世の中が変わってはくれないようなので、私は、ささやかに過ぎるかも知れないが、まず、私の教室にいる学生たちに何ができるかを真剣に考えているところである。

たくさんの方のご意見をいただければ幸いです。

琵琶

## (24)「ニートの多くは発達障害」政府も認める

[http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/2006/08/24\\_f00c.html](http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyosei/2006/08/24_f00c.html)

2006/8/24

「ニートの多くは発達障害」政府も認める--心理、教育、社会性の発達(24)

本日のニュースによれば、厚生労働省はニートに「発達障害」の疑いを認めて、支援に心理専門職を投入することなども検討し始めた。

"ニートに「発達障害」の疑い、支援に心理専門職も"、読売新聞から、ヤフーニュース、<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20060824-00000101-yom-soci> (2006.8.24 確認)

時間が経過するとこのニュースはネット上から消えてしまうので、下記に引用しておく。

-----  
ニートに「発達障害」の疑い、支援に心理専門職も  
-----

仕事も通学もせず、職業訓練も受けていない15～34歳の若者を指す「ニート」について、厚生労働省は就労支援の内容を見直す方針を決めた。

ニートの一部に、「発達障害」の疑いのある人が含まれていることが、同省の調査で判明したため。実態をさらに把握したうえで、支援機関に心理などの専門職を配置するなど、きめ細かい支援のあり方を検討する。

調査は今年6月、首都圏などにあるニートの就職・自立支援施設4か所を選び、施設を利用したことのあるニートの若者155人について、行動の特徴や成育歴、指導記録などを心理の専門職らが調べた。

この結果、医師から発達障害との診断を受けている2人を含む計36人、23・2%に、発達障害またはその疑いがあることがわかった。

-----  
(読売新聞) - 8月24日3時17分更新  
-----

厚生労働省は、これまでニートは就労訓練が足りないことが主因とみなしていた。この古い考えは[私がこのブログでも取り上げてきた「社会性の発達不全」という「発達障害」の考えを認めようとしな](#)いものであった。

[私が個人的にささやかに関与してきたニートの就職・自立支援施設（千葉県芝山）](#)においても、単純な就労訓練では事足りず、若い職員がさまざまな予見を振り払って全身全霊を傾けるといふ全人格的献身的な活動によって塾生の教育に当たってきた。ここで問題なのは、普通のニート（社会的ひきこもり）は、このような施設にはほとんど出てこない（入塾しない）ことであった。社会性の発達不全のために社会に出られないのがこれらの人々の障害なのだから当たり前なのだが、これら施設にいる人は家を出てこられる程度の軽症の者がこの障害に該当しない他のハンディキャップを持つ者に限られていたというのが実情である。70万人とも100万人とも言われるニートのうちの1%程度が入塾したに過ぎない。

大半のニートが「社会性の発達不全」という「発達障害」を原因としているということは[私が「心理、教育、社会性の発達」シリーズの初回（2005/7/17）から](#)、一貫して繰り返し指摘してきたとおりで紛れもない事実である。厚生労働省が、やっとこの事実を認めて対策に乗り出そうというのであるから、たいへんよいことである。私もこのブログにあれこれと書き続けてきたかいがあったものとうれしい思いでいっぱいである。おそらく関係者の何人かは当ブログのご常連の読者と推測されるので、それぞれのお高い立場から行動を起こしてその影響力を行使していただいたことにありがたく深く感謝申し上げます。

今回の報告は施設にわざわざ入塾して卒業した者に限った調査で、すなわち社会性の発達に障害を持つニートの比率を極端に低めた対象集団のうちであるにもかかわらず23・2%もの人に発達障害もしくはその疑いがあったことを認めるものである。すなわち、実は施設にも来れない多数のニートこそが普通のニートなのであるということに思いをいたせば、国民的に重大な問題がここに存在することがはっきりとしてくる。ニートの大半は社会性の発達を阻害された人たちなのである。心理専門職の投入などを歓迎するとともに、関係各位と各機関にいつそのご尽力をお願いするものである。

琵琶

-----